
不倶戴天

長 吉秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不倶戴天

【Nコード】

N4876S

【作者名】

長 吉秀

【あらすじ】

人間と妖怪が共存する異世界。主人公は伝統に重きを置き、人と妖怪と同じ町に住める政策を推し進める松谷家が収める城下町の一つで暮らす鬼。人と妖怪が共存することは能うかを描く伝奇小説。

河相村編 序章（前書き）

この物語はフィクションです。実在する人物、団体、事件などには一切関係ありません。

河相村編 序章

「不倶戴天」

目の前に広がる光景に広信は息を呑んだ。

見るもみすばらしい、流民がごとき人の群れ。行くあてもなく、食料を求めて都に流れ出んとして力なき両の足を進めているようにしか見えぬが、こちらを見るや否や憎悪がそのままとぐるを巻いた眼を、誰も彼もがこちらへと向けてきた。

「恐れるなかれ。所詮は統率もなき物の怪どもの群れよ。隊を整え、ゆるりと構えられよ」

良く通る大音声で配下の大将らに指示を飛ばしたのは栗毛の馬に跨る、髭を蓄えた武将。広信の父、萩原はぎわらひろみつ広光だ。彼の声に勇気付けられたか、しばし硬直していた隊全体が生き物の脈動する様に似てよく動き、見事に隊列を整えてゆく。

「伝令は来おったか？」

「いえ、今のところは」

「そうか」

と、にべもなく配下の言葉を耳にした広光は野太い笑を発した。

「予想より早いが、我が隊が他の諸将に先駆け一番の武功を挙げ、緒戦の花を添えようぞっ」

大音声に続いて、鬨の聲が兵卒たちの間から自然と沸き起こり、熱を持って立ち上る。その様たるや、これだけであるの異形の物どもを押しつぶさんばかりである。

「広信よ、恐れることは無い」

「はっ。心配には及びませぬ」

「強がるのは肩の力を抜いてから仰いませ広信殿」

強い力で大盾越しに肩を叩いてきたのは、浅黒い肌を持った朱色の甲冑をまとう武者だ。大胆不敵な彼は、余裕の笑みさえ兜から零

れ出していた。

「信綱か。隊の整列は良いのか」

「我が小隊は指示なぞ出さなくとも、いつ如何なる時でも一番槍を付けられる体制をとっておりますゆえ」

自信に裏付けられた答えに「そうか」とだけ返して広光は上機嫌そつに鼻を鳴らした。

この武者こそ萩原隊の先駆け大将、前田信綱まえだのぶつなである。

平和な時代が長く続いたが故に、こうした戦には参加した事こそ無いものの数々の夜盗、盗賊狩りでは必ず一番で駆け、数多の賊を斬り殺している剛の者である。

こう言えば蛮勇の塊のような男のように映るが、冷静に周囲を見渡せる眼も持っていた。状況をよく鑑み、無謀な事はしない。

主従関係こそあるものの広光の懐刀にして良き友人でもあり、幼少の頃は競い合った間柄であったという。お互い、絶対の信を置いている。

「しかし信綱よ。主も初めて夜盗狩りの時はこうであったと覚えておるぞ」

「ほう。それは初耳だが、そっくりそのまま殿に返しとつござる」「ふん」

この場においても冗談めいたやり取りで笑い合える二人を見て、いつしかこうなりたいという熱望、この場に恐怖している自分を恥じる気持ちと、初陣の緊張が混ざり合って広信の胸のうちは形容詞し難い高揚感に包まれていた。

「広信殿。恥じることはございませぬ。誰もが皆、広信殿のようになりまます故、お氣になさいませぬよう。我もまた、初陣という意味で緊張しており申す」

厳つい面を朗らかな笑顔に変えて、信綱は励ましてくれた。

幼少の頃から武芸の稽古や兵法を父と共に教えてくれたこの男には、すべてお見通しなのか。そうは言われても、なんとも情けない気持ちになつてくる。

「お若い故に怖いと思うのが、齒がゆいかも知れませぬ。とまれ、いつしか動じぬ気構えが出来るよ、拙者信じておりますぞ。広信殿には殿の血が流れておりますゆえ」

「褒めようが何も出んぞ」

横合いから広光が茶々を入れる。

「ならば、一番槍にて首級を挙げましようぞ。ご覧じ候へ」

言つて、黒毛の愛馬の腹を蹴ると自身が率いる先駆け隊の元へ、するすると兵卒たちの間をすり抜けて向かっていく。朱色の甲冑に包まれた背中へ、離れて行こうがその存在感が小さくなることも無い。

それに引き換え、この脆弱なる体軀はなんと貧弱なことかと、広信はまだ未熟な体軀を見、齒噛みした。

「奴のようになりたいか」

父の言に、広信は無言で頷た。戦場で初めて目の当たりにする信綱と父。二人の男が見せる平時とまったく異なる顔を見、ただただ圧倒されていた。

「ならばよし。まずはこの空気に慣れよ。焦らんで良い」

甲冑越しに父は力強く背中を叩いてくれた。それだけで広信は、両雄の気を貰つて何でも出来るような気分になった。

「広光様っ！。彼奴ら手に持った矢を番えてこちらへ向き直りましてぞっ！」

「うむ」と、綱で立てた梯子の上の物見からの報告に力強く頷き、「奴ら引かぬか」とだけ呟いて広光は前に一歩出た。

戦が始まれば馬廻りが周囲を固めてしまふが、今は旗や配下の将の間からでも十分に状況が見て取れた。

緩やかな勾配の中で出来た盆地のような場所に、彼らは居た。広光らは小高い丘を越えた所で彼らとばったり遭遇したため、下り坂の中腹より少し上といったところに位置取ることが出来た。

「鎬矢を放ち、狼煙を上げよ。近場に来てるであろう諸将にも知らせねばならん。あと、大殿には伝令を放て」

「はは」

命令され、ただちに馬廻りの一人が上空に向け、真紅に染めた布を巻きつけた鎬矢を放った。甲高い音が周囲にいる部隊に聞こえるかは定かでないが、布の色はこの方向を意味している。見つければきつかけにはなるだろう。

後方では早くも伝令と、狼煙の準備が始まっている。

一方、広光率いる千騎の前方で矢を番えた彼ら。

獣のようであったり、体躯が異様に大きかったりと、異形の者の中にあつては、頭に角を生やした以外は人間とそっくりな外見をした者が最も多く見て取れた。彼らは文字通り、矢面に立っていた。

彼らはこちらから見ると右手と背後に木の茂る小高い丘を持ち、左手には永延と続く平野。正面は千騎からなる我らにふさがれており、いざ引かめとなれば、そこにたどり着くには上り坂を上がらなくてはならない。

数は五百程だろうか。女子供までもが哀れにも、何かしら手に持つて戦う意思を見せてこちらを見ていた。幼少の者や赤子を抱えている者は少なく、百にも届かないだろう。そういった者らは少し距離を置いて、こちらから見て後方に位置していた。前の四百を盾にして、難を逃れるつもりなのだろう。

「小勢と侮るな。女子供と見えしも齡百を越える者もおると云う。取り逃がすことなく、各々方、心を鬼として鬼を討ちたもう」

応と、誰も彼もが目一杯に声を張り上げた。炎のように立ち上る士気が、ありありと見て取れる。湧き上がる熱が心地よい。

「鉄砲隊、前へっ！」

広光の大音声と共に、二百からなる鉄砲隊が前へ出る。彼らの存在が、兵卒の士気を裏付ける要素となっているのは疑う余地も無い。鉄砲とは、はるか北の異国より伝わりしまつたく新しい、今までの常識を覆す技術だった。

物の怪とは古来より争ってきたが、互いに根絶やしになることは無かった。しかし今、鉄砲を手にした我らは彼らをこうして追い込

み、絶滅にまで追い込もうとすらさせるだけの力を持つに至ったのだ。

従来の盾も鎧も一切が、この鉄砲の前に無力と化した。鉄砲を持つのは我らだけである。

「構え」

号令を受け、一斉に二百の鉄砲隊が各々の鉄砲を盾の上から構え、目当てで標的を捉える様はまさしく壯観だ。

火繩が燻る匂いと、立ち上る白い煙。

戦が始まるのだ。心の臓が一段と高鳴り、緊張は頂点に達する。

物の怪どもは、弓を持つ者が矢を番えてこちらへと進んでくる。

持たないものは後方に続いた。盾も無ければ、矢をくれる矢手もない。統率が取れている我がほうと比べれば、差は歴然である。

このまま物の怪どもを引き付け、鉄砲の射程に入るその瞬間、吐き出された鉛の塊が彼らを貫くだろう。たとえ強靱な身体を持つ化物物とはいえ、ただで済むまい。

そうして前列を崩した所で、先駆けが蹴散らすのだ。鴨を射るよなものだろう。余裕があれば、第二射も加えられる。

距離が、詰まる。

八十間、七十間、六十間、五十五間。

「放て！」

大声は、広光の物ではなかった。

物の怪どもの先頭に立つ黒衣を纏う、ひときわ大柄な体躯を持つ角を生やした男がそう発すると、おおよそ統率が取れているとは思えない集団の中から、弓を持つものが一斉に矢を放った。

「莫迦な」

思わず広光の口から、そう零れ落ちる。

この距離では鎧を貫けはしない。

「盾、上げて防げい」

余裕を持って広光は指示を飛ばした。盾手は盾を高く上げ、降り注ぐ矢を防がんとする。鉄砲放ちはその陰に隠れてやり過ごそうと

する。

まさかこれがかような結果を生み出すとは、誰もが思いもよらぬ所であった。

矢は次々に盾に命中した。狙いは当然付けられていない大雑把な物だが、命中した物のこと如くが盾を貫通し、半ばほどまで通った所であろうやく止まるほどの威力を見せ付けた。運悪く体の一部や、手を傷つけられたものも居る。悲鳴と怒号が一緒くたになって、耳朵を打った。

「撃ち返せ！」

下知は反射に近い。

こんな状態でも、鉄砲隊は良く動いた。一斉に盾は下げられ、鉄砲手は狙いを定める。先程とほとんど同じ状態で射撃体勢に入った。初陣者が殆どを占めるが、それを感じさせない見事な動きだ。

「放て！」

今度の声はお味方の物。同時に、引き金が引かれて火縄が火皿に落ちる。

轟音。

二百もの鉄砲がほとんど間を違えずに火を吹くと、今までに体験したことも無いような轟音に耳をおかしくなった。しばらくして甲高い耳鳴りまでしてくる。

鉛玉と同時に前が見えぬ程の硝煙が吐き出された。これはやがて穏やかな風に流され、徐々に目界は晴れていく。

まず見たものは、物の怪どもが苦痛にもがく様でなく、記憶をたどったように飛んでくる矢尻が日光を照り返して生みだす無数の煌きである。

悲鳴と怒号。これも先ほどと同様だが、ここで違うのはどうしてこうなったのかを道理を皆が悟った点だ。

「なんちゅう剛弓じゃ」

誰かが言った。

まさしくそのとおりだった。

広光や物見が距離感を間違えたわけでもなく、強い追い風が彼らに吹いている訳でもない。地の利はこちらにあるが、それすら齒牙にもかけずただ、彼らの放つ矢が人間の常識を遥かに超えた飛距離と威力でもって、こちらへ飛んできているだけに過ぎない。鉄砲の弾は届かずに地に落ちていた。

「装填を急げ！弓隊前進！彼奴らに応戦せよ」

下腹に響く押し太鼓の音。それと共に盾を構えながら素早く攻撃が出来る弓隊が前へ出た。

鉄砲は、威力こそ見えない矢足り得るが弾を込める時間が最大の泣き所だった。

まず**胴薬**（火薬）と呼ばれる発火性が強い粉末、続いて鉛の玉を砲身の口から入れ、かるかと呼ばれている棒で押し込んで圧縮する。次いで火蓋を開き、**口薬**（火薬）を入れる。

そうしたら一度火蓋を閉め、暴発を防ぐために火皿にこぼれている口薬を吹き飛ばし、火蓋を再び開ける。ここで火縄を取り付け、引き金を引くと口薬から砲身内の胴薬に引火。爆発して弾丸が発射される。

このように、戦場においては途方も無い手順を踏まなければならず、命中精度も弓に劣る。最初の一斉射撃を失敗すれば、良的になってしまう。

こうなれば広光は定石に乗るべしと考えた。矢を放ってけん制し、雇い兵で構成された先駆けが皆の恐怖を取り除きつつ注目を浴びたところで、勢いづいた槍衾でもって当たらせる。鉄砲は待たせておき、弓の間を見て使わせれば良い。

しかし、彼の思惑通り前に出た弓隊が、いよいよ矢を放つという時になって唐突にその動きが止めてしまう。

「どうした」

「ひ、火の玉につ。彼奴ら、火の玉を投げつけております！」

「火の玉だとっ！」

何を呆けた事を。広光は苛立った。

戦が始まってからは馬廻りが周囲を囲っていて良く見えない。怒気も隠さず、広光は馬廻りを押しのけて外へ出る。広信もそれに続いた。

そして啞然とした。

物見の言つとおり、あの物の怪どもは火の玉をその手の平から投げつけている真つ最中だった。青白いそれはまっすぐに弓隊の盾に当たって爆ぜ、そのまま盾を燃やしてしまう。

中には直にそれを浴び、全身を火に包まれる者も居た。手持ちの火薬に引火することを恐れた鉄砲隊は、装填するどころか早くも逃げ腰になっている。燃えるものとして無いのにもかかわらず猛り狂う青白い炎が縦横無尽に飛び回り、鉄砲、弓隊を混乱の坩堝に叩き落していた。

信じられぬ事だが、あれは幻でもなんでもない。今も火薬から引火して、全身を炎に包まれた鉄砲手がこの世の物とは思えない叫び声を上げた。

なんとか火を消そうとしていたが叶わない。走り転げた先で、両手足をただばたつかせた。

無事な者も目の前でそれを見ると、一目散に隊列を乱して逃げ惑った。固まっていると降り注ぐ矢が身体に生えるか火達磨にされる故、蜘蛛の子を散らすように隊は乱されてゆく。

もつとも、火達磨が隊の間を悲鳴を上げながら走っているのだ。尋常な光景ではない。

味方全体に恐怖が伝染している最悪の状態である。控える槍隊も狼狽しているのが容易に見て取れる。これを受けて、広光はある決断をした。

「太鼓役、退き太鼓をすぐさま打ち鳴らせ！」

「父上！」

広信は戦を仕掛けておいて早々に退却の決断をした父に、正直に言えば落胆の色を隠せなかった。馬廻りに守られ、本体に従軍してきただけの身ながら不満を漏らす。

若さ故に激情が先行する広信には、踏みとどまる兵など殆ど居らぬ事を、まだ理解出来なかつた。

「解らんか。戻つたら一々説明してやる。お前は馬周りの元におれ」「危のうございます」と、馬廻りの兵が二人の目の前に立って退かせようとする。

次いで、退き太鼓の合図が悲しげに木霊する。

前線では救いの声に似た事だろう。どうにかその場に止まっていた者らはこれ幸いにと武具さえかなぐり捨てて、本隊のほうへ戻ろうとする。出掛かつていた槍隊の兵卒らは、あの中に放られずに済んだと安堵の笑みさえ浮かべる者さえ居た。

だが「奴ら突つ込んで来ますぞっ」という物見の報告を受け、全員に戦慄が走つた。

「追い首取るつもりか」

これには広光を始め、周囲の者全員が顔を青くした。南へ逃れようとする彼らが、まさか追い首まで取るうとするとは考えていなかったからだ。

「我らが足止めします故、お逃げを！」

そう叫んだのは信綱だ。この混乱にも動じず、いつの間にか騎馬を前にと出しており、「気概がある奴は誰でも良いから集え」と、しきりに逃げる兵卒らを始めとし、本隊の方にも呼びかけていた。自らを盾にして、無事な本隊や兵達を逃がすつもりである事は、

広信もすぐ理解した。

「信綱！ならん！」

広光が叫ぶ。

集う兵は彼が率いる先駆け隊と、ほんの数人であった。確かに彼らならば、恐れをなして逃げる兵卒らとは違い、最後まで恐怖に打ち勝つだろうが、如何せん数で劣る。

結果は、目に見えていた。

「ここは一丸となって退くのだ。他の隊とはそう離れておらん。合流せば巻き返せる！」

広光は早口に説いた。しかし、信綱はこちらを見て笑って見せただけだった。呼びかけも止めず、持った槍を振り回して注目を集める。

まっすぐな男だとは解っていた。が、よもや弓、鉄砲の援護も無く、混乱の坩堝の中であって彼奴らに突っ込むなどと、愚かな事はしないと広光は信じていたのだ。

矛を交えぬ内に逃亡するなどという醜態を晒したくない気持ちは痛いほど解るが、あれらは人ではないのだ。

広光の願い虚しく、広信以下血気盛んな先駆け隊は呼びかけを止めると馬を進めて真正面から物の怪どもと相対した。距離はもう何十間も無い。

物の怪どもは、まず逃れようとしないう小勢の獲物を蹴散ちらかし、一兵たりとも逃すまじと、手に持った得物を振りかざして怒号を放ちながら迫ってきた。

「行くぞ。下馬して突撃。殿を守る盾となるべし！」

広光の大音声もかくやと言う大声で信綱は吠えた。先駆け隊もそれに続いて咆哮を上げると、彼に続いた。

そうして先頭同士がぶつかり合う。

同時に、甲冑を着た先駆け隊数名が、風に吹かれる落ち葉よろしく上空に放られるのが見て取れた。そのまま突き上げられた数多の槍で貫かれるか、物の怪どもの群れに転びまろて落ちるかした。その後どうなるかは想像に難くない。

迷信が尾ひれを付けただけではないのか。そう思っていた脅威を、まざまざと見せつけられた広光の口からは言葉も無く、うめき声だけが漏れた。鉄砲さえあればと、侮ってかかった失態であることは明白である。

「父上！」

広信の悲痛に満ちた声。父を呼んだは、どうするべきか決めかねた為だ。

今、広光の脳裏では二つの策が揺れ動いていた。

見捨てるか、玉砕か。
無論どちらも愚策である。だが、決めねばならない。

「皆」
武門の者として選んだこの道。なればこそと、馬首を返して号令をかけようとしたりしたその瞬間である。

鉄砲とは少し違う轟音が一つ。広光の声を遮った。

兵卒たちも何が起こったのか解らず、一様に足を止め、頭を抱えて身を低くした。

何が、起こったのか。

また物の怪どもが何かしでかしたのか。広信は、驚きから硬く瞑っていた目を開いた。周りの兵たちを見回す。が、一様に怯えの色こそ見えるが、何も無い。

ならば先駆け達か。

全身から血の気が引いたが、そちらへ向けた目界めかいに移ったものは戦の手さえとめ、何が起こったのか解らないといった体の両者が、ある方向を見つめていた。

何が。

「殿、あれを」

大柄な体躯を持った馬廻りが同じ方向を指差す。丁度、正面から見て小高い丘となっている林のほうだ。

ほぼ時を同じくしてそちらから響き渡る法螺貝の音。次いで、木々の間から湧き水の如く次々と旗が上がる。

「雇い兵。役行衆の旗に」

「伏兵かっ」

旗印から、物見がそう判断した。

彼らは今回の討伐戦、永石家配下の傭兵として雇われていたはずだ。

だが彼らという場所と、戦に参加せずに居た物の怪どもの距離は五十間もない。旗を見たところ2千近い数が伏せていたようだが気付かれずにこの距離に居れるものなのだろうか。

広光の疑問も他所に、彼らは木々の間から車輪に乗った、大人一人分以上もありそんな奇妙な筒を五本、坂を利用して戦に出ていない物の怪ども百余りに直接向けた。

その少し後方に居たものが手に持った軍配を振ると、何やら先から白煙を上げる棒を持った兵が一樣にその筒の上部にその先端を当てた。

刹那、筒からは先ほどの轟音と、鉄砲とは比較にならない量の煙が立て続けに吐き出された。

物の怪どもの群れの中で、土と草が垂直に巻き上がる。その中には赤いものと千切れた四肢も混ざった。

不発は無く、垂直に巻き上がった土の柱は五つ。内いくつかは止まる事を知らぬとでも申すように、跳ね転がりながら群れの中を突っ切っていくのがはつきりと見て取れる。進路に居たものは面白いように四肢や頭のどれかを飛ばされて倒れる。群れを突っ切った何かは、しばし誰も居ない平原を駆けると、最初に比べて随分と控えめな土煙を上げて止まった。

大筒。広信は聞いた事があるだけだった。

この場に居る殆どの者が実物を見るのは、これが初めてではないか。

こちらも異国から伝わった技術で、鉄砲がそのまま大きくなったものであるという。だが、想像以上の凄まじさだ。背筋さえ寒くなる。

悲鳴と怒号が今度はあちら群れからあがった。何匹かは化けていたのか、巨大な獣と姿を変えながら役行衆が伏せていた方へ向き直る。広信らの追い首を取ろうとしていた群れも半数ほどが、怒りを露にしてそちらへ向かって行った。

一方、役行衆は次の段階に入っていた。

前衛と思しき鉄砲隊が木々の隙間から飛び出したのだ。盾すら持たず軽装だが、その分動きは早い。

なだらかな丘を下って平原に到達する。混乱する群れの約二十五

間程の所まで一気に詰めた所で、何時の間にか三列の隊列で鉄砲を構えた。

数は倍の三百程か。先ほど獣に姿を変えた数匹の物の怪共が、既に目と鼻の先まで肉薄しているというのに恐れた素振りもない。

まずは合図も無く一回目の一斉射撃。

これは一列目の者らが放ったもので、有効射程内に居た物の怪どもが、物を蹴散らかすように倒れてゆく。特に目前に迫っていた数匹には相当数の弾丸が命中したらしい。「冗談のように巨体がひっくり返り、そのまま動かなくなった。

ここで押し太鼓が響く。それを合図にしたのか、一列目の兵らが見やがみ、二列目の兵らが二度目の一斉射撃。前のものを弾除けにした者らが、今度は同じ様で倒れた。

どつと、数頭の騎馬を先頭に先駆け隊と思しき歩兵が木々の隙間から出でて、坂を下り始める。鉄砲隊の数を越すか越さないかという大規模な物だ。

ここで二列目の兵らはしゃがみ、三列目の兵らが鉄砲を構えた。

三度目にもなる一斉射撃の轟音。これによって標的にされたる物の怪どもの群れは、成す術も無く銃弾を浴びて倒れ伏した。

見る限りあの百程は殆ど息絶えた。母子らしき屍が累々と横たわっている。後顧の憂いを断つたのだ。

ここで図つたが如く白煙を突つ切り、先駆け隊が物の怪どもの直前に到達する。騎馬に跨っていた物は直前で殆どが下馬。そのまま突撃を開始する。

次いで、先ほど見事な一斉射撃を行った鉄砲隊は鉄砲をその場に捨て、抜刀してそのまま突撃にかかった。

尚も響く押し太鼓と地響き。木々の間からは次々と歩兵らが掛かり来る。

「い、いけるっ」

見事な統率振りに唾然としていた広信だったが、一足先に我に返ったと思われる父の言葉に、自分もはたと我に返る。

「我らも返すべし！」

大音声と友に広光は抜刀し、兵達を煽った。あのような物を見せられた後である。簡単に士気は盛り返し、先駆け隊の陰でうろたえていた槍隊を先頭にして真一文字に向かってゆく。見れば、絶望的とまで思われた先駆けたちも混乱に乗じて普段の勢いを取り戻していた。

このまま勢いに乗じて役行衆と挟撃出来る。包囲殲滅も夢ではない。

広信もこの勢いに乗じて、抜刀し父について行かんと必死に走る。この時、十五の時であった。

二

「ん・・・」

混濁した意識が徐々に戻ってくる。どうやら、いつの間にか寝入ってしまったようだ。

「ああ、いかんいかん」

声を出して見ると喉がからからだ。口の中が乾いてあまり気持ち悪い。汗も相当かいているのが解る。

次いで頭を起こしてみると首が痛む。あまり良い姿勢で寝てなかったらしい。

「イタタタ・・・っ」

項に手を回して首を動かすと、ぴりぴりと痺れるような痛みが走った。寝違えた時程ではない。少しすれば大丈夫だろう。

足は感覚があまりない。しまったと意識すると、びりびりとした独特の痛みが襲ってきた。とても動けない。

背中から畳に倒れこんで足を伸ばしておく。しばらくすれば動けるようになるだろう。痛みの勢いが衰えてくるとくすぐったくなり、

なんだかもどかしい。

染みが少し浮き始めた天井から首ごと目界を右へと移す。ふすまを隔てて軒下の廊下があり、その先には手入れがされた柿の木や植え込みがある中庭だ。やけに薄暗い。

「随分寝てたか・・・」

昨晩は蒸し暑くてよく寝れなかったし、その為かいつも起きないような早朝に起きてしまった。おかげで今日は日中から眠くて仕方が無かった。気を抜いたらこの様だ。

一つ 伸びをして節々が固まって痛む身体を起こす。少し頭がだるいがしばらくすれば直るだろう。

痺れも取れた所である。起き上がって軒下へと出ると、外の様子がありありと見て取れる。

「一雨くるな」

薄暗いのは鉛色の、見るからに思い雲が空を覆っているからだ。

今にも降り出しそうだ。雨戸を閉めたほうが良いかもしれない。

しかし、こんなにも薄暗いというのにちっとも涼しくない。気持ち悪い湿った風が吹きつけて、木の葉を揺らす様はどこか不安を覚えさせた。童わんこが泣き出す気持ちも解かる。

「まだ日が降りるには早いくらいか」

日が降りるくらいなら、あの二人が来るはずだ。丁度、その前までに起きたのは僥倖か。少しは片付けられるやもしれん。

踵かかとを返して見ると、身体を預けていた机があった。上には書きかけの紙と筆が置いてある。

何処まで進めただろうか。

畳を踏んで近づいた。何度も書いた文面が綴ってあるが、なんとも中途な場所で終わっているではないか。

なんだ、まだこんな所か・・・。

少し残念だった。もっと進んでいれば、気も楽だったのだが仕方がない。そういえば、こんな所まで進めていた記憶があるような、ないような。

文句を言おうが仕方が無い。最後は自分で終わらせねばならんだ。

とはいえ、期限にはまだ余裕がある。ひとまずきりの良い所まで進めて良しとしておこう。

部屋の中は薄暗い。少し見難いし、失敗したら面倒だが、火をおこすのも面倒である。

机を引きずって軒下の方へと近づけた。あと少しなのだから、これくらいで良いだろう。

どう続く所だったか？

茶碗に入っている冷め切った茶を飲み干して乾いた喉を潤すと、文面が途切れているところを見た。丁度しめるところの下りか。

余程眠かったのだろう。きちんと筆を置いて、紙はずらしてある。おかげで汚さずに済んだらしい。

「ええと・・・」

墨はまだ乾ききっていない。多少色の違いが出るかもしれないが、正式な物でもないし、何度も書いて文面を暗記してしまっている写しのような物だ。かまわないだろう。

筆を取り、先端に墨を取る。頭のたるさはもうなく、眠気も無くなったために落ち着けそうだ。最後の一、二行程など造作も無い。

「盛り返したる兵ども、乱れかかり、しのぎを削る。火花を散し、押し返すに至る。異形なる物の怪ども、手負い死人数知れず、ついには崩れ逃げけり・・・と」

口で呟くと同時に筆を走らすと、何度も見た文面が白い紙に踊る。これで、残すところは後の様子の部分のみである。今日のところはここまでで良いだろう。

気が抜けたか、眠くも無いのに欠伸が出た。

まったく。こんなもの書かせるからあんな夢を見る。何度も思い出させるからやけに鮮明だ。

思えばあれから十五年が過ぎた。早いものだ。

半生もとうに過ぎ、三十路に達した。もうしばらくすれば、あの

時の父と同一年になる。

「父か・・・」

こちらに身を移してからは一切の連絡も無く、こちらからもしていない。

生きておれば五十。人間五十年と言うから、果たして存命かどうか。

戦も無いのだから当然噂も届かない。調べようと思えばいくらでも調べが付こう。が、そこまでする興味もない。

あのような様でも一番槍として評されたのだ。悪い暮らしはしてないだろう。吾がいなくなつてからは、弟の広政の世話にでも没頭したのではないだろうか。逃げられぬように。

もつとも、広政はあの時点でも落ち着いていた。そうはならぬか。自然と、皮肉な笑いが出る。我ながら、よくあの時は行動したと思う事がある。若さとは、そんなものか。

とまれ、悔いたことなど一度も無し。実際、こちらに身を置いてからは全てが斬新で、充実していた。

鉄砲を始め、異国の言葉や技術、そして異人。加えて無縁とばかり思っていた通力。

新しく覚えることは山となり、これまで学んできたことは殆ど役に立たなかった。

この身体はあれからろくに成長せず、武辺者となる事を早々に諦めさせてくれたのも、今となっては幸いのように思う。

「広信様？いらつしやいますか？」

若い女の呼び声が、玄関の方から入ってきた。

まいった。部屋の掃除をしていない。

「お来たか。少し待って居れ」

ひとまず机と、書いた書状は片付けよう。それと、火も付けねば。さすがに話をしておれば日は落ちるだろう。

手っ取り早く済ませようと手に持ったそれらを適当な場所にしまいい、うろろろしていると何やら玄関が騒がしい。

「広信様つ。参りましたぞ」

今度は若い男の声だ。丁度同じ時間に来たものらしい。厳密には伝えてなかったが、真面目なものだ。

「悪いが、そこで少し待って居れ」

今思えば、こんな一雨降りそうな頃に呼び出してしまったのは気の毒だが、仕方あるまい。

一通り取り繕って、外出せぬからと垂らしたままの髪もざっと結んだ。こんなところか。

「よし、悪かったな。来て良いぞ」

大人しく待つてる二人を呼んだ。

河相村編 竹前城下にて(前書き)

序章からの続きです

河相村編 竹前城下にて

梅雨に入ったことを誰もが自覚した数日後である。

竹前城下町。城を取り囲む侍町の外側に位置する町民地を、一人の若者が馬に跨り疾駆していた。

年の頃は二十歳を過ぎた程。掘りが深い端正な顔立ちをしているが無精髭故か、彼は少し老けて見えた。

そして、現実味が無いほどの巨軀だった。

身長は一問（約180?）をゆうに越えて、あとは八寸（約24?）くらいあるだろうか。腰に差した刀もさることながら、乗る馬でさえ尋常の一回り以上である。

人馬共に動けば音が鳴りそうなほど、無駄を削いだ筋肉に包まれているのが着物越しでも解る。

そんな男が梅雨晴れの中、厳しい表情で街道を走っているのだ。子供は離れ、大人は道を明ける。刀持ちだけは、少し機嫌が悪そうに彼を見ていた。

どうも何か、急いでいる風である。

行けば家屋につき当たるのは、いざ戦になりし時、敵方に町の多くを見渡せないようにする城下町特有の工夫であるが、それが一層この男を苛立たせる一因となっているのは、想像に難くない。

それでも彼は右へ左へと見事に手綱を操り、まっすぐ前を見ている。目的地がはっきりしているのだろう。探し物と言う感じではない。

「あそこか」

伸び放題の髭を割った口から、独り言が漏れる。彼の目界は、街道沿いにある飯屋に向かっていた。

「すまぬ。どいてくれ」

馬の足を止めるとそのまま歩かせ。今しがた街道を通りがかった人々を分け入ってゆく。

「遙^{はるか}。おるか？」

大きな手で飯屋の暖簾を分け、馬上から探し人の名前を呼ぶ。

「？」

それに反応して振り返ったのは、今まさに最後の団子を小さな口に押し込んでいた、二十歳になるかならないかくらいの、若い娘だった。

小柄な体躯で、輪郭はほっそりとしている。肌は色白く鼻筋も通り、涼しげな目元を持ったその顔立ちは、化粧っ気こそないが十分に色気に満ち、魅力的である。

少し釣り目がかつた真つ黒い瞳は夜空の果ての如き深さをたたえていた。平時なら不思議と引き込まれそうなものだが、今は不機嫌さが加わったからか、言いよつの無い凄みがあった。巨躯の男が一瞬鼻白んだ程だ。

そして、彼女の一番の特徴はその角だった。

瞳同様真つ黒な髪を割って前頭部から突き出る一本の角。この異形な角が、彼女が人外であると正直に語っている。巨躯の男同様現実味が薄い。

この蒸した空気が固まった風にも感じ得たが、遙と呼ばれた女は巨躯の男の意図を悟つたらしい。一度瞬きをすると件の凄みは無くなり、生来のものだらう柔らかい印象に包まれる。こうなるとまずこの角が無ければと惜しまれる。

遙は楽しむはずであったその団子を、すばやく租借して飲み込んでしまう。細い喉が大きく鳴った。

「どうしたの？」

女としては少し低い声で聞いた。

「客だ」

「客？」

遙は難しい顔をして馬上の男を見返した。どうにも思い当たる節がなさそうである。

ともかく急いだほうが良いのだという事は、汗まみれの男を見た

ので察したらしく、すぐさま席を立とうとした。

「騒がしいと思つたら、政重まさしげじゃないかい。このところ会つてなかつたかな。久しぶりじゃね」

と、奥から湯気の立つ茶を持ってきたのは少しふくよかな体格の女性だった。愛嬌のある顔は丸みを帯びており、想像される年齢より彼女を若く見せる。肌色もよく、健康的という言葉がぴったりと当てはまる女である。

「あ、りよさん悪いな。今日は急ぎなんだ。今度ゆっくりしていきよ」

「あらそうかい。忙しい子達だね」

りよと呼ばれた女は、眉を八の字にすると少し寂しげな息をついた。

「ご馳走様。ごめんなさい。せつかくお茶頂いたのに」

「良いんだよ」と、笑顔を向けるりよに頭を下げると、遙は差し料を帯に差した。女物の巾着から小銭を出して手の平で数えると、必要な分を静かに机の上へ置いた。

「前も世話になつてるから、別にいいんだよ？」

と、りよは言うが、「それは出来ないよ」と困つた笑顔を向けて、遙は申し出を断つた。軽い礼をしてから大股で政重の方へと歩む。

りよは、母が出かける娘を見送る時の表情でそれを見ていた。

「政重は男前なんだから、もうちよつと髭整えなさいな。遙と居ると悪党とか人取りみたいだよ」

「そう言わないでくれよ」

気後れしないりよの冗談に政重は苦笑した。

ひよんな事からの縁だったが今ではすっかり馴染んおり、良き理解者でもある。気後れせずに付き合ってくれるりよの冗談で笑い合えるこの時そのものが心地よかつた。

「乗せるぞ」

「ん」

馬に乗つたまま政重は遙の手をつかんで、軽々と自分が座る前へ

と乗せてやった。

通常、馬に二人が乗せる場合視界の隔たりになるため乗り手が人を後ろへと乗せるのだが、なるほど。遙は平均的な成人女性から見れば少し小柄な程度だが、一間越えの政重と並べば、二人の背は子と親ほどもある。こっちの方が二人とも前が見れて都合がいいのかもしれない。

「悪いなりよさん。また来るからよ」

「あいよ」

簡単な別れの挨拶。政重はそのまま手綱を握って馬を出した。来た道を引き返す。

「客ってどういう事？」

この奇妙な相乗りを、やはり人は我関せずと避けてゆく。互いにもう見慣れた物だ。さして気にする風も無く、遙は先ほどから気にしていた答えを求める。

「非番なのに悪かったな。河相村かわいむらから来たガキか、もう元服したか？つてくらいのが、お前に会って話がしたいと言いだしてな」

政重は少々申し訳なさそうに、丁度自分の胸辺りにある小さな頭に向かつて答えた。

「縫ぬいじゃダメだったの？」

納得がいかないといった体で、遙は首をかしげる。

「ああ。頭目に会わんと信用できんとさ。なんか生意気そうな奴だ」
「そう・・・」

しばしの沈黙。川の水のように後ろへ流れ行く景色の中で、何かを逡巡している彼女がどうした事を気にしているかを、政重は理解している。

どうにもならない現実と言うやつはあるが、なればこそ、ちょっとでも明るく振舞って欲しかった。

「あの小さいのがそこまで言うんだから大事な話なんじゃないか？」
「大事な話か・・・。なんだろう」

言って、遙は唇に手を乗せた。何か考えているときの癖だ。思い

当たる節がないか、記憶を辿っているのだろう。

「俺ら以外の妖怪でも出たか？」

「この辺りじゃ、もうあまり考えられないけど……。奉公所も通して無いから急っていうのは、あるかもね」

つい先日も大百足を狩りだしたばかりだ。あらかたこの辺りの妖怪は片付けたから、他所から流れてくるしかない。可能性はいくらでもある。

「でもあんまり急ぎって感じでもなかったぜ？最初ははつきりなくてウロウロしてたのを、縫が捕まえたんだと言ってたよ」

「そっかぁ……」

もう少し、言葉を選ぶべきだったか。良い機会になるかもしれないと伝えたかったのだが、また難しい顔をされてしまう。

もっともう、まっすぐの方が良いか。

「ま、聞いてから考えれば良いだろ。そう考えても、ここじゃわからねえよ」

竹前城下^{ちくぜん}は、大きく三つの区画に分けることが出来る。

竹前城中心として、囲むように侍町がある。ここは城主の膝元として、城内で勤務する上流の武士が住まいを構える。

その外側を取り巻くのが経済の中心である町人地。先ほどまで遙が居た、りよの飯屋もそこに位置しており、住人や作物を売る百姓で賑わう。

その外を取り囲むのが主に下級の武士が住まうもう一つの侍町だ。ここには上級武士の別宅も存在する。

遙と政重は町人地を抜け、今は外側の侍町の道路を相乗りで駆けていた。

下級武士の邸宅と上級武士の別宅では一目でそれと解る作りの違いがある故、格差を否応も無く見せ付けられる。中には自前で家をこさえられない物が住む長屋もあった。

道路さえ整備されているが、穴が開いた障子よろしく開いた空き地は数年前に肥大化する城下を改修した名残である。

そんな空き地の中に、特に豪華な作りの屋敷がある。周りには空き地が広がっており、それを避けているようでもあった。さながら、川の水が減った際に現れる小島といったところか。

この近くには隣町へと至る街道へと続く北谷門もある。それ故、町人地程ではないがそこそこの活気が常にあつた。

「解つてるたあ思うが、縫は相当へそ曲げてるからな」

頭の上から、「相当」という部分を特に強調した物言いで政重は注意を促してくる。容易にその様子が想像できて、苦笑いが出てきた。

「解つてるよ。大丈夫」

あの小島のように建つ屋敷こそ、遙達が住まう我が家である。

漆喰で固めた白い塀に囲まれており、中の主要な建物は全て瓦葺という贅沢な作りになっている。塀には門まできちんと構えられ、普段観音開きで開放されている。夜間は門かんぬきで施錠していた。

現在は五人で暮らしているのだが、内二人は外に出ていることが多いので正直に申せば持て余してしまっている状態だ。また、庭には柿木や植え込みがあり、弓を扱う射撃場まで完備されている。

この屋敷は竹前城城主、松谷茂義まつたにしげよしから頂いたものだ。

身に不相応な屋敷だと、遙は帰ってくるたびに身が引き締まる思いだつた。同時に、この気持ちを忘れぬようにと努めている。

「着いたぞ」

「ん」

屋敷が目に入ってから、馬で駆ければあつという間に門である。政重に促されるまでもなく、遙は馬から下りた。

「悪いねえ。せつかく出かけたというんにさ」

飯屋での政重と同じような言葉をかけてくれたのは、開け放つた門の柱に寄りかかり、腕を組んでいる少女だった。

「別に良いよ。それでお客つて？」

「ああ。あのガキかい」

少女の愛らしい唇から紡がれる言葉には、まむし蝮のような毒が染み込んでいる。まだ十台も半ばで、ようやっと童から抜け出し始めたというくらいの彼女には、不相応な物言いだ。

「縫、そうは言うけど・・・」

成るほど。これは相当鬱憤が貯まっていると遙は見た。

縫はこの屋敷では最高齢ながら、姿かたちは最年少であり、一番の人間嫌いでもあった。

見目美しい顔立ちながら、口ぶりや仕草は大胆で、なにより一番の特徴はその瞳と髪だった。

双方共に真つ黒な遙とは違い、淡い栗色の髪と大きな瞳。この国では珍しいながらも評価はされない。それを元の少女はどう思っていたかは今となっては解らないが、縫は気に入っていると言う。

もつとも、顔立ちだけで見れば幼げながら凜としたそれは、男共の心をすぐに掴むだろう。少々派手な小袖を着用している事から、大事に育てられた武家の娘とも言え、万人が納得するのではないだろうか。

無論、黙っていればの話ではあるが。

「はん。見たままの感想を行ったまでさ」

鼻息も荒く、縫はまくし立てた。

「物欲しそうにこつちを見てうろろしているから、せつかく着替えて茶まで入れてやったというのに、だれぞ主はおらんのかとかぬかしてわしには取り合いもせぬ。非番で居らぬと申せば連れて来いだと？」

方眉がひくつき始めた。自分で言良いながら記憶が反芻はんすうされ、怒気が目に見えて彼女を覆ってゆく。

「舐めるにも程があるわ」

堪忍袋の尾が完全に切れている。荒々しく吐き捨てると門の柱を蹴った。小袖の裾から露になった形の良い脛からは想像もつかぬ威力によって大きな柱が悲鳴を上げた。

「じゃあ、まだ客室に？」

「ああ、居るとも。とつとと追い返して」

「お前はもう黙ってるよ。あんまり怒っていると寿命が縮むぞ」

湯水の如く吐き出される毒は、政重の大きな手が塞いだ。どんどん声が大きくなっていった。聞かれるのを恐れたためだろう。

「ははつ。それだけ怒れる元気があるならそうは簡単に縮まる事もあるまいて」

さも愉快げなくもった笑いは、三人の内の誰でもない。

のそりと門の陰から現れてそう言ったのは、小柄な馬ほどもあるうかという巨大な狐だった。奇妙な事に、その背には大小様々な籠、袋など様々な物入れが括りつけられている。

「お、訓景かけくさん。今日も出るのか？」

「ああ。今日は晴れてるからね。今のうちに薬草でも拾っておこうかと思つてね」

巨大な狐は、そうやって大きな口の端を吊り上げて目を細める。

この姿の際に笑おうとすると、そうなるのだそうだ。

この者は訓景という。この姿では解らないが、政重より年長の青年である。

「そろそろ手を離してやったほうが良いんじゃないか？」

あつ、と気付いて、政重は縫の口　というよりは、殆ど顔全体を覆っていた手を離れた。彼女は苦しげに息をつくとまた何か言い出そうとするものだから、すぐさま同じように塞がれた。

「遙も気苦労耐えないな」

それを見た訓景は、流石に悪いと思つたか笑いを堪えながら、うんざりとした風な遙を氣遣った。

「昔からだから」

ため息混じりに遙は答えた。

「あの子は客室に通してある。河相村から来たお子さんだ。百姓だろう。縫さんがお茶出してくれたが、それ以降は待たせているから、急いでおいたほうが良い」

「ん。解った。ありがとう」

獣の口ではさぞ話し辛いことだろうが、きちんと状況を説明してくれる訓景に遙は感謝した。彼に「気をつけて」とだけ伝えると、屋敷へと小走りで向かう。

縫の事はどうにかしようと考えていたが、政重に任せる形となつてしまった。少し心もとないが、あの場には訓景も居る。今は、客室に急ぐことを優先しよう。

遙は風で乱れてしまった腰まで届きそうな黒髪を、手櫛で簡単に整えながら玄関へ上がり、草鞋を脱ぐ。足音をあまり立てぬよう早足で廊下を歩き、簡単に着物も直した。

そうして客室の前にまで来ると、一つ小さく咳払いをして「入りますよ」と断りを入れてから、ふすまを開ける。

「あ・・・」

僅かな息遣いと共に目を合わせて来たのは、農村から来たと思われる少年だ。年の頃は外見だけで見た縫より少し下くらいか。成人したかどうかは、見た目だけでは判断が付かない。

おさまりが悪そうな黒い髪は、くくり纏められ、茶せん鬘になっている。日焼けしかかった赤い頬と、爪の隙間から取れきれぬ土が、百姓の出自なのだと言語っている。

「来客の方ですね」

遙はそういつて穏やかな表情を浮かべた。気の強そうな釣り目を丸くしている少年に一礼すると、縫が用意したのだろう少年の真正面に位置する座布団まで歩み、静かに座した。

傍らにはお盆に乗った湯飲みが二つ。一方は空で、もう一方は手付かずのまま冷め切ってしまった。本腰を入れる前に階段が頓挫したことを物語っていた。

「若輩ながら、私がこの屋敷を取り仕切っております。名は茂元遙しげもとのかと申します」

それを尻目にして物憂げな表情にならぬよう、遙は作法に従って深々と頭を下げた。

本当に家主が出てくるとは思わなかったのか、はたまたどうしていいのかわからぬといったところなのか。少年は目を白黒させていたが、すぐ我に返ったように唇を引き結んで、背筋を伸ばした。

「三郎と申す」

三郎とだけ、少年は名乗った。とすると、幼名だろうか。

顔を見る限り、活発そうな少年だ。確かに、政重が言った通り生意気そうではあるかもしれない。

子供同士で遊べば大将格に上がりたがる。顔立ちや喋る雰囲気からそんな印象を受けた。成人前だと確認すれば自尊心が傷付いてしまっただろうか。ここは黙っておくべきだと、遙は考えた。

三郎は恐らくこうした場合は初経験なのだろう。ぎこちなさを見せながら、遙と同じように頭を下げた。面を上げてから数度瞬きをする程の間が空く。

一目で緊張していると解る彼は口を半開きにして、言葉を選んで繕おうとしているらしかった。

「何なりと申してくださいませ」

そう緊張されても困ってしまう。せめて少しでも気が緩めばと、遙は先手を打つ形で三郎に微笑みかけた。

「いくつか本題に入る前に、聞きたいことがある」

「なんででしょう？」

真っ黒い瞳が三郎の顔を覗き込む。彼は居心地が悪そうに一度目を逸らしたが、意を決したか、彼女を強く見返すと口を開いた。

「失礼は承知だが、その・・・角は本物か？」

「ええ。そうですよ」

即答した。これに三郎は面食らったらしく、再び驚いたように目を開いた。少しくらいは隠そうとするとか、そんな事を考えていたのだろうか。

確かにこれがあると、肩身が狭いし、人は避ける。かといって隠し通す事は到底無理な話でもある。いずればれるのならばいっそ堂々としていた方が良く、自分の先祖を否定する気も、遙には無か

った。

「私は見ての通り鬼と呼ばれる妖怪です。同属の知人も数人居ますが、皆こうなっていますよ」

自分の頭から生えている角を指差してそう言って見せた。三郎の不思議そうな視線は、そこに釘付けとなった。

「最初に相手をしたのは十台半ばの娘では無かったですか？」

「確かに。まだ幼げだった故、話は出来ぬものと」

「ああ、そうでしたか」

自尊心が強い縫が悪気も無くそう言われてどんな顔をしたろう。

想像してしまい、思わず口元が緩んでしまった。

「失礼しました。あの者は縫と申しまして、普段は正体も明かさずにああして若い女子を装ってますが、中身としてましては齡二百を越えてます。この屋敷では一番の年長なんですよ」

齡二百。人の平均にして、約四倍である。

「何を笑うのか」と、慥然としていた表情から一転、信じられぬといった様子で、三郎は再び遙の角を始め、他にも何かあるのかとまじまじと目を^{みは}瞞る。

いきなりそういわれても現実味を帯びないのかもしれない。

「妖怪を見るのは初めてですか？」

言つて、遙はその前髪を手で掬つて角の生え際を見えるようにした。作り物ではなく、たとえば、鹿と同じように自然な生え際が見えたはずである。

「村に出ても大人が刀持ちが片付ける故、初めてだ。町でも見かけてない。でも火の玉なら一度、見たことがある」

三郎は正直に答えているだろう。様子からうかがい知れる。

確かに在るものでも、見たことが無ければ聞いた話から想像をするしかない。そうなると、輪郭は相当ぼやける事になる。

「そうですか」

遙は「なら、見ててください」と手の平をゆっくり三郎の方へ差し出す。

彼は何かと目を細めて、遙の手の平を見入る。一見しては人の女と同じ小ぶりな手だ。何も無い。

が、そこから何の前触れも無く青白い炎が燃え上がった。年相応らしい悲鳴を漏らして、三郎は後ずさる。恐らく、彼が見たものといえはこれだ。

「怪火あやしびです。色々な伝承がありますが、多分夜これを使って提灯代わりにするのを見られましたね。結構便利なんですよ」

その青白い炎は、やがてゆらゆらと手の平を離れて行き、部屋に迷い込んだ羽虫を思わせる動きで飛び回った。

無害だと解ったか、三郎はバカ正直にそれを目で追っている。どうなっているのだと顔に書いてあった。

「すいません。実の無い話になってしまいましたね」

ゆらゆらと飛び出した怪火を、遙は自分の近くまで寄越して空中で縫いとめる。手を伸ばしてそれを握ると、何も無かったかのように消えてしまった。

「私達を直接頼ろうというのですから、余程の事でしょうか？」

先ほどからずっと目を見開きっぱなしの三郎の顔を覗き込んで、今度は遙の方から此度の訪問に対する質問をした。

肝を冷やしてしまっただろうか。一抹の不安はどうしても残る。

異質な物を見れば、まず前と後ろ、顔の位置、次に何をしてくるか等を確認たがるのは人の心理だ。これは知恵があれば共通だろう。それが不鮮明だと、ひどく不安を感じる。だからこそ、遙は「何者だ」と言われれば、全てをつつがなく見せることにしていた。

これで肝を冷やされれば、そこで終わってしまうのだが。 。
「・・・奉公所まじも匙を投げた事だが、聞いてくれるか？」

三郎はそう尋ねてきた。意を決したと見える。遙は内心で胸を撫で下ろしたが「番所が匙を投げた」という所が気に掛かる。

「はい。話して下さい」

何処かばつが悪そうな三郎の顔を真っ直ぐに見据え、遙はこう答えた。

外では少し雲が多くなってきたのか、部屋に薄暗い陰を落とす。
夕立でも来るかもしれない。

河相村編 河相村にて(前書き)

竹前城下にて からの続きとなります

三郎は良く喋るようになった。

緊張が解けたのか、接待をされていることで安心したのか。ともかく、途中からは好奇がその他の感情を上回ったと見える。

この辺りは年相応であろう。成人を目前に控えているとはいえ、男子としてはまだまだ遊んで居たい頃だ。

話を聞き終えた頃には相当雲行きが怪しくなり、わざわざ強雨になることを知っていたいながら返すのも気が引けた。

そこで支障がなければ部屋も空いているし、一泊を薦めると彼は嬉しそうに承諾した。あまりにも快諾するものだから親御の事も気に掛かったが、曰く「家族は村に居るが喧嘩で飛び出してきた。そういう日は帰らない事もあるから、誰も心配しない」と、膨れっ面で応じる始末だった。

とは言っても、家族は家族である。心配しない訳は無いと見て、悪いとは思ったが言伝は黙って行った。

話が終わった際、政重に頼んで馬を飛ばし、町民地の百姓をあたらせた。丁度荷を畳んで帰る間際であった百姓が河相村から来たというので、先述の理由から一日預かるが心配はしないで欲しいと伝えてもらうと、「しょうがないガキだな」と笑いながら了承してくれたという。常日頃からなのだろう様子が、ありありと伝わって一言だ。

そうして昨晩はそのまま屋敷で一夜を明かした。桶をひっくり返したような雨になったのは、そうしたやり取りが終わってからすぐだった。

落ち着いてからは、あの不慣れそうな物言いはしなくなり、自分を出して振舞うようになった。湯をやれば二刻（約一時間）近くは入り浸りであったし、その後時間が空けば小さい長屋がそのまま納まりそんな屋敷を興奮して歩き回っていた。

嫌がりながらも礼を失しないようにと縫がこさえた膳もよく食べた。夜は落ち着かずによく寝れなかつたらしく朝は眠そうだったが、今は元気である。

終始緊張してぎこちないよりは良いが、臆することもなくあらゆる事柄に関して執拗に食い下がってくる三郎に嫌気が差さなかつたといえは、正直嘘になる。

もちろん好奇に駆られた三郎に悪気がないことは百も承知だったのだが、流石に触れられたくない事もある。そういった類の話題は、なんとかお茶を濁してやり過ごした。

「知ってるかい。お前さんが住んでいる村は何故河相かわいと言うか」「縫が馬上からそう言つて、三郎の顔を覗き込んだ。

遙の気苦労を察したかどうかまでは解らない。が、昨日三郎に見えないところであれほど遙に負けにくいぐらいの立派な角を生やし文句を垂れ流していたというのに、今朝からは縫が主な話し相手をしてくれていた。

後に政重から聞いた話によると、しばらく收拾がつかない荒れっぷりだったというが、なんとか落ち着いたらしい。膳を用意する頃には少しふてくされていいる程度だったから、どうにか宥めてくれたのだろう。

とはいえ、その話を聞いたとき既に政重は、二日酔いをした時と同じ顔をしていた。相当の労力を費やしたことは容易にうかがい知れた。

「いや、皆が呼ぶので考えた事は……。聞かされてそういう名前なのだと言うだけで、不思議がることもなかつたですね」

「そうかい」

内心では薄気味悪くその様子を見ている遙の引く馬に乗った縫は、大きな目を細めてにんまりと笑い、また歩く三郎の顔を覗き込んだ。

今三人は河相村に繋がる城門、河相口までの街道を歩いていて。

三郎を乗せてやろうと用意した馬には縫がさっさと乗ってしまい、それきりこれだ。本人曰く、「年寄りには敬うもんだ。若い内に歩け」

だそうだ。

慣れない早起きまでして備えていた政重はそうして置いてけぼりをくらい、憤懣ふんまんやるかたない顔を押し隠して見送ってくれた。

まさかこうして縫が付いてくるなどと、遙は夢にも思わなかった。「永石との国境に久瓦川くがわがあつて、そこへの竹前川が二つ、河相村から見れば下流でぶつかるだろう？」

「はい」

「川は離れた所から連なつて出来ていてね。しばらく同じような太さで並行になつてるもんだから、相つて字が入つて河相つて名になつたんだそうだよ」

「はあ」

難しい顔をして三郎は生返事をした。

竹前川はそれぞれ南北と頭につけて識別するが、あまり分けて話す機会もないので混同してそう呼ばれていた。

西から東に流れるこれらに挟まれて、竹前城下が成り立っている。河相村は城下から見れば東に位置し、村はずれまで行けば二つの川が近づいてゆくのが見て取れるという。その先で支流でもあるこの川は、ひとつにまとまつて大河久瓦川へと注いで、いずれは大海へと出でるのである。

「もう廃墟だろうが、下流の方に小さい神社があるだろう？」

「ええ、聞いたことはあります。もう誰も近づかないそうですが」

「そういう事柄から、仲睦まじくなるつてんで縁起担いでてね。結構昔は、新婚だとかの民草が足を運んだんだそうだね」

縫は伊達に歳を重ねていない。妙なことまで良く知っているのは承知しているが、今日は何時になく饒舌である。

三郎も三郎で、相手が本当に高齢という事を段々と悟ってきていた。話せば外見に不相応な貫禄が伝わってくるのだらう。外見上自分の姉ほどの少女の言葉を真剣に受け取っていた。

「いつごろからですか？」

「そうさねえ」

かりかりと、何かをかじる音。

縫が三郎の質問に対しての答えに必要な記憶を反芻しているのだろう。何かを思い出したり、考えたりするときには良く左手の爪を噛む。当人いわく、二百年経っても治らない癖だという。その音だ。

「話を聞いたのは、まだ戦乱が始まる前だったからね。百五十年くらい前じゃないかね？」

三郎は驚嘆の声を上げた。

「だから、それ以前からじゃないかい。正確なところまではわからないよ。人のいう事に興味もなかったしね」

百五十年前。縫はその時期各地を転々としていたと話していたから、この付近にも来たのかもしれない。その頃はまだ竹前城は存在しなかったというから、集落にでも住み着いたのだろうか。

「今わしのこと、なんか余計な事考えなかつたかい？」

「え？」

「さつきから何も喋ってないじゃないか」

唐突に話を振られ、しかもそれが的を射っていたので若干遙の声が上がった。

「私が入り込めるような話じゃないじゃない。そんな昔のこと」

「そうかね」

にやりと縫が笑った。三郎に向けたのとは違う。彼女が人を弄る時に浮かべる笑みだ。

「せつかく行くんだ。帰りに好きな人でも乞うてみたらいいんじゃないか？」

「廃墟に行っても仕方ないでしょ。それに縫に言われたくないよ」
言って、手綱をわざと引っ張ってやった。馬は後ろ足で軽く立ち、暑さ故にだらだらと乗っているだけだった縫は不意を突かれる格好になる。必死な面持ちでつかまらなければならなかった。

落ちれば当然、夕べの雨で湿った土まみれになってしまう。なんとか体勢を保ったまま、「乱暴だねまったく」とだけ文句を垂れた。「そういえば、遙は幾つなんだ？」

三郎の矛先が変わる。もう対等に口を聞かれている辺り、大体の目星はついていそうだ。

「今年で二十三だったかね」

それくらいは気にすることでもないと思ったが、先に馬上の人物が勝手に答えている。

三郎は目を丸くして「じゃあ兄貴と同じくらいか」と呟いた。二十歳は越えてないと思っていたのかもしれない。

「止まったのは十九の時だったね確か」

「ん。そうだよ」

「止まった？」

やはり掘り下げられる。この辺りは知られている部分だと思い込んでいたが。

「わしは化けてるからこうだが、こいつ等はね、大体二十歳前後で見た目は歳を食わなくなるんだよ」

化けないで済む一部だけだけどね、と付け加えた。

「ああ、それで」

これにはすぐ納得したらしい。慣れて感覚がずれてきてるとは、本人は自覚してないだろう。

「もう老けないのか？」

人間からの正直な疑問だろう。

「ゆっくり老いるが、大体は若いままってのが多いよ。まあ何もしなけりゃ生きてく執着が無くなっちゃうから、人間の方が必死で良いんじゃないかとも、わしは思うよ」

「そんなもんですか？」

「そんなもんだよ」

含みを持たせて縫は言う。

一旦そこで会話が途切れる。こうしている内に河相村へと続く城門、河相口にまで足を運んでいた。

ここから見える門番は二人。小太りの男が一人と、長身の男が一人だ。彼らの傍らには小さな小屋があつて、なにかあればそこで詳

しい話や質問がなされる事もあるが、もっぱら小休止や、道を尋ねる物に地図を開いて、詳しく道案内をするような使われ方をしていた。中にまだ何人か門兵がいるはずである。

「おおつ。遙嬢さんじゃないか。どうしたんだい今日は？」

下腹の出た小太りの男がこちらに気付くと、殆ど怒鳴るようなだみ声で出迎えてくれた。

赤銅色に焼けた肌と、太い腕。堀の深い顔つきは厳ついものの、ずんぐりとした目には愛嬌があり、いつものように機嫌が良い笑顔を惜しみなく振りまいている。

「呼び捨てで良いって、いつも言ってもどうせ聞かないよね元親さんは」

困ったように笑いながら遙は応えた。

彼は普段遙が城外へ出る際に最も多く使う皆谷口の門番をしている、元親という男である。

肝が据わっているのか、単なるうつけなのか、一目会っただけでは大抵一步置くか煙たがるかするという者が殆どだというのに、遙とは初対面にも関わらずぺちゃくちゃと女のようによく喋った。

むしろこの男の勢いに遙の方が当惑して吞まれてしまったものだが、何度か顔を合わせる内に打ち解けた。

理由を聞いたら妻子が居る身だというのに「俺の好い顔だからだ」と、しゃあしゃあと応え、屋敷に何度も顔を出す。お調子者という言葉が人の皮を被ったような男だ。

それからはすっかり穰さん扱いが定着してしまっている。悪意は無いのだろうが何時も大声でそう呼ばれるのだから、たまったものではない。

「いやいやあ。あんなお屋敷を取り仕切ってたんだ。たいした娘だつて、俺あ見込んでんのよ」

昼間から酔っ払っているのかと疑いたくなるくらいこの男はいつも機嫌が良く、似たような世辞も毎度のことだ。それから本題にはるのが常だった。

「でよつ、どうしたんだい今日は。河相口に来るなんて珍しいじゃねーかよ」

「それはわしらの台詞だよ」

馬上から縫が割って入った。確かに、普段は皆谷口に居るはずだ。それは遙も気になっていた。

「おうつ。縫さん。今日も眩しいねえ」

「嬉しい事言ってくれるじゃないか。もう飽きたがね」

らしい嫌味を言われ、「おつといけねえ」等と元親はおどけてみせる。笑いが起こった。

この男、人を褒めるとき言葉には躊躇が無い。楽観的だとしても言おうか。縫は単なるうつけと言っているが、悪い意味ではない。彼女がそう評するのは、たまさかなことである。

「今日はこの奴が、時期の変わり目で風邪こじらせててな。変わりに俺が来たんだ。皆谷口に居る奴には声かけといたから、いつも通り通れるぜ」

通行証が必要なのは何処でも変わらないのに、何を息巻く必要があるのか。鼻息も荒く、元親は得意げに分厚い胸板を張って見せた。

「安心しなよ。今日は皆谷口にや、用無しだからね」

「おつと、そうだったか」と、とぼけて元親は額を叩いた。いちいち動きのある反応を見せてくれる男である。

「そっちの小僧は百姓だな。何かあったのか？」

「そうそう。あんたに会えて好都合だよ。遙、話してやんな」

ようやっとこちらにまで話が回ってきた。経緯を話せそうである。

「こちらは河相村の三郎」

遙が紹介をすると、ひとまず三郎は元親に頭を下げた。普段皆谷門にいる元親は顔を知らないだろう。そもそも百姓の顔など、一日の出入りが激しいときなどもあるから覚えるというのも無理な話である。

「一月前、夜に河相村の川縁で、相次いで三人の村人が行方不明になったのって覚えてる？」

率直に問うた。

「おおつ。覚えてるとも。だがよ、あんまり声を大きくしたくはねえ話だな」

お喋りな性格上、近隣の町や農村で起きた事柄に関して元親は顔が広い。が、さすがに声を潜めて答えた。

三郎の話によれば、唐突に居なくなつた三人は若い女一人と男二人であるという。

拐かしかどわ（誘拐犯）から文が届いたわけでもなく、何かしらの予兆も無かつたという。

共通点は釣りをしていたという事だけだ。女のほうは、居なくなつた恋仲の男を憂いて川にまで行つた際、姿を消した。

この男女に関しては駆け落ちたともとれなくもない。だが、仮にそうだとしても家からは何も持ち出されていないという。

いくら恋仲の相手が居れば良いとしても、自分が持っている小遣いにさえ手付かずなのは不自然である。日にちも少し開く。

一度搜索もしたそうだが何の痕跡もなく、ただ忽然と溶けるように人が消えたとしか解つたことはなかつた。

それからは気味悪がつて誰も本腰を入れようとせず口を閉ざした。遺族もあまり公にはされなくなつたようで奉行所もそれを察して早々に手を引いてしまつたという。

「んーつ。俺もそれ以上のことは聞いてねえなあ。でも確か、妖怪の仕業だとかのたまっているのは何人か見たぜ」

広い額を撫でながら、経緯を聞いた元親は申し訳なさそうに話した。

「それも一月前を、ちょっと過ぎるくらいまでだなあ。それっきり何もそれに関しては聞いてねえよ」

「そう・・・」

この件に関しては一月も時が流れている事から、噂も既に殆ど風化して忘れさられていることだろう。先述の通り、奉公所もすぐ手を引いてしまつたので遙も知らなかつた。

「何度か穰さん達を疑う莫迦も見たが、そんな事する理由が見当たらないんでな。説教してやったぜ」

元の勢いが戻ったか、また元親は鼻の穴とだみ声を大きくして自慢げに胸を逸らす。ここまで気持ちが良い媚が売れるのはこの男だけではないだろうか。遙はまた困ったように笑って「ありがとう」とだけ返した。

「私達以外の妖怪はこの所殆ど姿を見せないから、ひとまずはちょっと行つて見るだけ見てみようと思つて。また何か動きがあれば、ちゃんと準備して行くんだけどね」

「ふむ。そうか」

がりがりと元親は汗が伝う顎をかいだ。

「解つた。俺の方でも口が達者な奴に会つたら当つとくぜ」

自分がそうだったら、この者にだけは言われたくないだろうと遙は思った。あまりにも自信げだったので、可笑しくて失笑してしまふ。

「何笑つてんだよつ。さつさと通れ」

笑われた元親はわざとらしく嫌そうな顔を作つて軽く遙の頭を軽く叩くと、投げやりに門を指差した。

「よろしくね」

「応つ」

「おいおい、これ忘れてるよ」

分厚い胸板を叩く元親に、縫が馬上から何かをひらひらさせて示していた。

「あ、いけね」

通行証だ。

公に妖怪の出入りが許可される松谷領内では、人に化けるといふ事柄からのいざこざを避けるために通行証が設けられている。これを提出しないと通ることは出来ない。

元は一つの紙面に押された印を二つに割つた形となっており、その内一つを所持する。これを渡して、割れた印の部分がぴったり合

うかを門兵が確める。無論、合わなければ取調べを受けなくてはならない。

遙の屋敷では各々が所持している。また、刀か脇差の柄に施された家紋の装飾も一緒に見せる必要があった。

「遙穰さん達は真面目にやってるからなあ。いざ偽者が出てくるか心配でしょうがないよ」

大仰な心配をしながら、元親は縫から通行証と脇差を受け取り、三郎からも受け取る。こちらは木製の板切れに焼印を押しした簡素な物である。

彼はこの暑い中にあつても懸命に走り、すぐさま小屋から笑顔を携えて出てきた。

「問題なしだ。通ってくれ」

「ん。ありがとう」

「応よ」

元気の良い返事に後押しされて、河相口を潜ればすぐに河相村へ通じる農道へ出ることが出来る。

竹前城下の郊外に広がる農村では、一年の内に麦と米を作る二毛作が、かれこれ長く続いている。

竹前川を整備し、用水路を蜘蛛の巣のように張り巡らせているので水が豊富であり、かつ平地であることから農耕は盛んだ。

この時期は稲を作る為に張った田の水が強い日差しを反射して、直視するのも難しいほどである。植えたばかりと見える可愛い稲の苗が、そよ風を受けて何度も頭を垂れていた。

丁度田植えが終わった場合である。つい先日までは村全体が伝楽の音に包まれ、早苗さなへ乙女おとめが忙しくなくあぜ道を通っていた事だろう。

今は一段落を経て、まだ頼りない苗の様子を見て歩く農夫の姿が目立つ。そのため、すぐに遙達の姿が農夫達の目に触れた。

村の間での情報伝達は驚くほど早い。昨日政重が言伝をしたが、それも皆承知なのだろう。数人が口々に何かを言いながら、家屋が集中する村の方へと歩を運んでいるのが見受けられた。

「なんとも見世物みたいだね」

縫はそれが気に食わないようで、忌まわしげに吐き捨てた。

「仕方ないよ。町の刀持ちなんて、良い目で見られるわけないんだから」

「おまけに人でなしだからな」

百姓達を擁護する遙に対して、縫は自虐的な皮肉で応じた。三郎はばつが悪そうにうつむいてしまい、無言である。これ以上は彼にとつても居心地が悪いかもしれない。しばらくの間、遙は黙っていることにした。

ちくりと肌を刺すような視線が集まる。排他的な傾向が強い農村特有の、様々な感性が含んだ視線である。不快だが、遙はその中で気後れしないよう心中で活を入れ、気を引き締めた。

そうして無言のまま歩を進めると、やがて村の入り口にたどり着いた。この頃には既に何人かの男が待ち構えていた。

様々な空気が入り混じっている。三郎を見ている農夫の中では呆れ顔の者が最も多いが、少量の怒気が抑えきれないで渦巻いているため、場は緊張している。

「三郎。昨日は何処へ行つちまったのかとおもつたが、まさか妖怪の世話になるとはな」

挨拶もすることなく、苛立たしげに一人の男が口を開いた。釣り目の感じが三郎と似ていた。

名前からして三男であろうから、二十歳過ぎくらいのこの男は、先ほど話にも出た兄ではないだろうか。この場を緊張させる怒気は、彼から発せられているようだ。

「すまん」

申し訳なさそうに三郎が、彼の兄らしき人物に先んじて誤ったのは遙達の方だった。

礼が言えぬといったところか。兄らしき男が黙って促すと、そのまま三郎は二人で村の奥へと歩いて行く。あの小生意気だった少年の背中が、未熟な体躯以上に小さく見える。

少し間を置いて、頭だけ下げた初老の男もそれに続いた。彼もあの二人と何処となく雰囲気が似ている。父か、親戚か。いずれにせよ、身勝手さへの怒り半分、身の心配が半分といったところか。

「福ふくいち一と申す。私の村の者が、世話になったようじゃね」

男達の中心に居た老人が、一呼吸置いてから前に出てきて一礼をした。

人間五十年と言うが、それをゆうに越していそうな男性だ。頭髪も髭も、真っ白く染まっており、額には長い年月を経て穿たれた深い皺がいくつもある。

この老人という種類の人と会つと、殆ど老いなくなる妖怪とは違う貫禄があると、遙はいつも感じていた。

「いいえ。私たちの方からの勝手な申し出でしたので、彼をあまり責めないであげてください」

「いや、あんた達は間違っていないよ。あの夕立の中じゃ、子を返すのは気が引けるもの無理からぬ事だ。わしも、そう考えると思うよ」

「そういつて貰えると、こちらも気が軽くなります」

最初に「私の村」と口にしたのだから、彼が村長だろう。この村を通つた事はあるが、会つたのは今日が始めてだ。粗相がない様、取り合わねばならない。

「挨拶もなく失礼しました。私は竹前城下の」

「いや、知つとるから良いよ。あんた鬼だろう？城下に住んどる鬼といえは、嫌でも耳に入るよ」

手の平を遙に向けてから、やんわりと彼は言葉を遮つた。口元は笑っているが、目は表情がないままだ。あまり、良い印象は持たれていないのかもしれない。

遙は「あ、そうですか」と恐縮しながら頭を下げる。これくらいは覚悟の上だったが、真っ先に難色を現したのはやはり人間嫌いからだった。

「随分な言いようだね。まいつちまうよ。人でなしは、この村じゃ

挨拶もさせてもらえないのかい」

出迎えの時点で馬を下りた縫が、二人の間に割って入ったのだ。最後の一言が癪に障ったのだろう。

「これに関しては事情がありましてな。お察し願いたい」

「はんつ。そうかね。まあ、そうだろうさ」

縫はわざと大きなため息を漏らした。見えない言葉が両者の間で飛び交ったのは感じていたが、これ以上場の雰囲気悪くしたくはない。遙は手の動きだけで「そこまでにして」と縫を制止を促す。

「田植えが終わった直後のお忙しい中、突然の訪問には謝罪します。ただ、私達は一宿一飯の恩を売りに来たとか、そういうつもりはありません」

今、当主は遙である。物言いたげだが、縫は決して平静さを失っている訳ではない。遙の意図を察して、黙って一步下がった。

「では何と？」

「三郎さんから要請を受けました。何も要りません。例の行方不明の事件に関して、お話を聞かせていただきたいのです」

遙は凜とした態度で率直に述べた。

それを真摯な言葉だと理解したかどうかは解らない。だが、彼女の真っ黒い目の中を見て感じるところはあったのか。先ほどまでは少し違う口ぶりで福一は答えた。

「申し訳ないが、その件に関しては終わった事でしてな」

「それはどういう意味ですか？」

終わったこととは、どういう意味だろうか。

三郎から話を聞いたのはつい昨日の午後である。徒歩では時間がかかるから、正午過ぎにはここを出たとしたら今の時刻でほぼ一両日。解決したというのならば、あまりにも唐突すぎやしないだろうか。

「見て貰った方が良いかもしれませんな」

傍に居た一人の男が「例の物を持って来てくれるか？」と福一に命じられ、その場を早足で離れた。先ほどの答えが、現物として存

在するという事らしい。

男は近くの家屋の裏手に入り、すぐに戻ってくる。その際、両手にくたびれた壺を抱えている。

古びた壺だ。所々がひび割れ、口は欠けていた。埃にまみれ、男が指で触れた箇所には真新しい跡がくつきりと残る。使われなくなつてそのまま置かれていたものとすぐ解つた。

警戒の為か、男は「どうぞ」と遙から数歩離れた所に壺を置く。

「中を見る」という事らしい。

遙は村長に目配せすると、彼は軽く頷いた。それを受けて、壺を取り上げて中を覗く。

ひどく生臭い。魚が腐つたような匂いが形の良い鼻腔を突いた。

肝心な中には、これも割れた陶器の欠片と見えなくも無い破片が無数に入っていた。

「これ・・・」

思い切つて指で取り上げて見る。山芋よろしくぬるぬるする粘液がべつたりと付着していて、触つていてあまり気分が良い代物ではない。欠片と欠片の間で透明な糸が引いて、壺の口から出したところで切れた。

「どう思つ？」

日の光が当つた欠片はこげ茶色で、所々で薄かったり濃かったりと色彩は斑だ。所々にコケが生えており、細かい凸凹がある。

「恐らく化け蟹の殻だろうね。間違いないよ」

遙が思い当たつた節と同じ事を縫は言った。化け蟹といえば、川に住む人食いの妖怪である。

「遺族は今、喪に服しておる。食われたのが解つたからな」

死体も上がらないはずである。水中に引き込まれれば、陸に居る生き物などただ食われるのを待つしかない。

残酷な話だが、血や食べかすは水に流されてしまい、見つけることは不可能だ。文字通り骨も残らないだろう。

「昨日の日に退治を？」

遙は取り出した殻を壺の中に戻しながら福一に問う。

「いや、昨夜ですな。退治をしてくださったのは、若い巫女様に付き添う僧兵で、わし等は関わってない」

「僧兵？」

新たな人物が出てきた。

「お二人は神託を受けての旅で、色々な場所を歩き回っているそう。昨日の夕立の中、この河相村に行き着いた」

渡り巫女とかいうやつだろうか。一箇所の寺に留まらず、旅をしながらその先々で祈願や能を行う巫女である。

「若く屈強そうな僧兵でしてな。無理を言ったら一晩の宿を約束に、清く受けてくださった。長旅でお疲れで雨まで降って居るといふのに関わらず、すぐ調べを入れてくれましてな。その時丁度出くわして見事返り討ちになさったという事でしたな。今朝、それらを渡された次第で」

この欠片はその時の物らしい。化け蟹は食用にされる蟹をそのまま大きくしたような妖怪で、全身が殻に包まれている。それがこうなっているとすれば、硬い物で叩いて打ち倒した際の破片なのだろう。

「化け蟹の死体は打ち捨てちまったのかい？身は食えないが、背中の殻は何かと使えるんだよ」

過去にそういった事例があるのだろうか。時たま縫は思いもよらぬ事を言う。

「それは知るところではなかったが、死体はお二方が流したそうで。今は祟らぬ様、供養しているため誰も近づかぬようにと、念を押されておりましたな」

「そうかい」

ただでさえ物騒な生き物だというのに、妖怪の体をどうにかして使うのかと、傍に居た村人達は縫の言葉に一瞬鼻白んだ様子だった。しかしその中で、福一は村の長を名乗るだけの事はある。驚いた様子ではあったが、周囲と異なって毅然とした姿勢までは崩さない。

しかし化け蟹退治に供養まで行うとは致せり尽くせりである。彼らの事を離す福一の表情が朗らかなのも無理からぬことか。

「それじゃあ、わしらが出る幕じゃ無いね。神職の仕事だ」

そう言つて縫が遙に向かつてそつと目配せをする。「もう帰ろう」といふ事らしい。遙は、若干無念そうに目を伏せて頷いた。

とまれ、町の人間に対して排他的な傾向が強い農村では、後腐れしない他所の神職という存在はありがたいのだろう。

「解りました。そういう事であれば、私達はこれにて失礼します。今日はお忙しい中、ありがとうございます」

口惜しい部分もあるが、様々な要素が重なり合つた結果だ。間も悪かつた。それに、ここまで手が尽くされているなら何も言つ事は無い。

遙はその場で深く一礼した。その垂れた頭を戻す前に、縫はさつさと馬に跨つてしまふ。早いとこ帰りたいのが心情なのだろう。

帰り道でしこたま出るであろう愚痴を、遙は覚悟しなければならなかつた。

「いや、待ちなされ」

「それでは」と、遙が軽く会釈をして踵を返そうとした時、意外な人物がその足を止めさせた。

福一自身である。

「この村の者が世話になり、この暑い中足を運んで送ってもらつた事に相違はござらん。もうすぐ昼になる故、少しくらい私の村で休んでいきなされ」

思つても見ない申し出だつた。思わず遙と縫はお互いに顔を見合わせてしまふ。それを見た福一は嫌味混じりに付け加えた。

「さすがに突つ返したと話されたとなれば村の評判も落ちかねん。

まあ、大した事は出来んし、あんた達の心情を考えれば虫が良すぎる話かもしれん。とまれ、これで水に流して貰えますかな」

会つてから初めて笑顔を浮かべ、福一はそう言つた。

案内されたのは、現在使われていない空き家だった。囲炉裏を取り囲む板床の一室が殆どの空間を占め、脇にはしゃがんで調理するための台所がある標準的な家屋だ。

「むさ苦しい所だが、ここ我慢してくれ」との事であった。

そうは言うが、現在使っていないにも関わらずしつかりと掃除がなされており、かび臭さはおろか、天井にはつき物である蜘蛛の巣すら見あたらない。すぐに誰かが村の一員となっても、すぐに受け入れが出来るようにする為だろうか。

開け放った窓からは風がよく入ってくるが、生ぬるい。それでも室内は日陰となっていて、通気性も良く過ごしやすい。板床はひんやりしていて、冷たいところに触ると気持ち良かった。

「まあ、解決したんだから良かったんじゃないかね」

水筒に入った冷やい井戸水を一気に飲み干すと、縫はそう言った。結局あの後、福一の申し出を受けたのは遙の方だった。

迷惑がかかる事も考えたが、せっかく申し出をしてくれたのだ。気を遣ってくれたのだから少しくらい世話になる方が良く考えた。

「ん。間が悪かったしね」

遙は楽なように姿勢を崩して苦笑いを浮かべた。

水筒の水を口に含んで飲み込むと、それが喉を通って身体を冷やしてくれる。手取り早く涼しくなるには一番の方法だ。

「そうだよ。今回は間が悪かった。それで良いじゃないか」

縫は大の字になってごろりと横になる。満たされたのか、腹に両手を当てた。

案内された後にしばらく待っていると、まだ田畑には出れないくらいの子が杖を抱えて持ってきたのだが、玄関の手に置くのと逃げるように去ってしまった。

縫はともかく、角を持つ遙はやはり怖く映るのかもしれない。町を歩けば大人も自ずと遠ざかるのだから、無理も無い。

童が置き去りにしていった杖は何かと見てみれば、握り飯

が四つ入っていた。

それだけとしては大き過ぎる平たい笹だ。配って回った後なのだろう。

福一が言っていたのはこれだろう。丁度二人で割って食べ終わる頃、今度は三十路ほどの男が瓜と水筒、味噌を抱えてもってきてくれた。

夏場は塩気が欲しくなる農村らしい。受け取った瓜は味噌を舐めながら齧って、冷や水で一息ついたところだった。

「せっかく自分達で解決したんだ。わしらが出る幕じゃ無いよ」

両手を頭の後ろで枕にして一つ伸びをしながら、縫は静かに諭してくる。

「わしが福一の立場だったら、同じ事を言った。こんな状況で、へりくだつちまう程度じゃ、長は務まらないからね。もしかしたら、心にもなかつたのかもしれないよ？」

あの時、二人の間で見えない会話が成り立っていた。縫はそのことを言っているのだろう。

内容は、大方予想が付く。長なら村全体の総意を口にしなければならぬ。だから、あんな物言いだつたのだろう。

「でも、もうちょっと誰か、早く来てくれくれればなって」

胃の辺りで蠕っている気持ち吐き出してしまいたい。そんな甘えから、遙は縫にそう打ち明けた。

「まあ、人間共からすれば何処まで行こうがわしらは余所者だよ。

それは間違いない。お前は鬼だし、わしは人食い。字の通り、化け物だ」

自嘲気味の言葉は、静かに遙の耳朵を打つ。

「元親やたまもそう何処かでは思ってるよ。絶対にね。今更どうしようもないところはあるよ」

普段なるべく考えないよう心がけている事柄が、憚ることなく縫の口から溢れてくる。

「そうなんだけどさ」

彼女が言つたとおり諦めたつもりになっていたが、何処かで吹っ切れないで居る。遙はそんな自分が嫌だった。

「だけど、ああして接してくれるじゃないか。三郎だって、思い切つて来てくれたんだ。お前の考え方が正解かは解らないし時間もかかるだろうけど、どうにかなるよ。そのうちね」

「ごろりとこちらに身体を向けて、にやりと縫は笑つた。そうしてくるだけで、随分と前向きになれる。

「今日は随分優しいじゃない？」

このような揚げ足を取る言葉は、そこで横になっている縫が吐くのだが、少し調子に乗つてまねてみる。

いや、ただ気恥ずかしいだけか。

しかし答えはなく、上を向いたまま目を閉じて鼻を鳴らしたただだ。

縫もあんな事を言つた手前、気恥ずかしくなつたのかもしれない。そう思つて、意地悪く付け足した。

「ありがとね」

「はん。何を今更」

不機嫌そうこちらを一瞥して吐き捨てる、年端もいかない人間の皮を被つた化け猫は、ふてくされたように転がつて背を向けた。

その様子を見て口元が緩んだが、見られたら後で面倒なので彼女とは反対の方向に体を向けた。

聞いてもらうだけでも随分楽になるものだ。腹が膨れての眠気が、唐突にやってくる。

今後の予定もないことだし、昼の時間も一刻は残っていないだろうが、まだ少し余裕がある。ちょっとくらい転寝してても良いだろう。

そつと寝そべると、着物越しに床の冷たさが感じられて心地良い。ゆっくりと目を閉じた。

こうすると普段意識しない音が聞こえたりする。離れたところで誰かが歩いているのが解る。二人くらいだろうか。

遙はそのまま遠ざかるものとばかり思っていたが、足音はしだいにこちらへ向かってくる。欲求に抗って目を開けると、急いで半身を起こした。

「あ、遙？」

足音の主は、玄関から覗くように顔を出して控えめに声をかけてきた。気が強そうな釣り目の少年である。もう馴染んだ顔だ。

「三郎？どうしたの？」

もう家族との折り合いは付けて来たのだろうか。朝より少し低め声をしているから、叱責があったのかも知れない。

「なんだいかしこまって。親父殿との折り合いは、もうつけて来たのかい？」

縫も起き上がってそう聞いた。

「ああ、それはもう済んだんだけど・・・」

何か言いたそうなまま、三郎は言葉を飲み込んでしまう。

馴染んだ後は気後れしなかった彼が、妙にそわそわしている。父親が同行しているのだろうか。足音は二人分だった。

三郎からの話を聞いて一応の礼くらいはしておかなければなるまいと、そういった所だろうか。ならば、失礼がないようにしなければならぬ。

「あんたらが、竹前城下の妖怪さん達かい？」

そうして遙が立ち上がるうとすると同時に顔を見せたのは、三郎の父親にしては若すぎる、袈裟を纏った僧そうてい体の男だった。

まだ少年の気が抜け切らない顔立ち。頬に残るにきび跡などが、若々しさを物語る。

髪はざつと括っているだけで、人が良さそうな顔立ちに少し伸び始めた無精ひげと、引き締まった体つき。どことなく袈裟が似合わないのは、野性味を感じさせる雰囲気があるからだろうか。

「あ。ええ、そうです。福一さんが仰っていた僧兵の方ですか？」

突然の事に、遙の声が少々上ずった。三郎の父親だろうと思いつ

んでいたからだ。

僧の方も驚いたように目を丸くしていたが、少し間を置いてみると一人で納得したように、にかつと笑った。

「失礼仕った。俺は渡り巫女の彩乃と旅して回ってる新助しんすけと申す」
彼はそう名乗って、丁寧ていねいに頭を下げた。

「こちらこそ。えっと、私は茂元遙。こちらは同じく縫」
「よろしゅうな」

こちらもち立ち上がって簡単に会釈する。縫もそれに続いた。

「確かに、屈強そうな身体してるじゃないか」

後ろから縫が茶々を入れた

「いや、そんな事はござらん」

そう謙遜はしたが、悪い気はしてないらしい。はにかみながら新助は頭をかいた。

「して、その僧兵が何用だね？」

声を低くして縫は問うた。

あんまりに訝しむ調子だったので、遙は思わず縫に目を向けたが、悪びれるでもなく肩をすくめただけだ。

屈強な僧兵とやらが一体何の用なのか。確かに妙な勘繰りを入れなくなる縫の気持ちも解るが、初対面で人物がわからない以上、遙はもう少し砕けた言い方をしてほしかった。

「あいや、失礼。警戒させてしまいましたな」

そのやり取りを見て悟ったのだらう新助という僧兵は手をぶんぶんと振った。

「悪気はござらん。ただ、田に入った女達が噂しておりましてたから、その妖怪という者と一度口をきいてみたいと思ひましてな。物見遊山でこうしてきて見たのですが」

新助は一旦言葉を切って、遙と縫をよくよく見比べた。

「とまれ、このように若い女性の方とは思ひませなんだ」

最初に見せた意外そうな顔の理由はこれらしい。

「騙す様で悪いが、わしは二百を越えてるよ？」

「・・・え？」

随分正直な反応を示す若者だ。冗談とは取らず真に受けたようで、固唾を飲むと怪訝そうに目を凝らして縫を見た。

しかしどう努力しようが、彼の目には十台半ばの少女にしか見えないだろう。

「失礼しました」

一つ咳払いをして、遙が間に入ってくる。

「この者、真っ直ぐな物言いをするので。気を悪くしないでください」

「ああ、いや。俺の方もなんか、驚いちゃまって」

ばつが悪そうに新助は口元を緩ませた。

「もしかすると、そちらの方は姿を変えられますな？」

「良く知ってるね。正解だよ」

「ははあ。なんでも年月を経ると不思議な力が宿るというのも、本当なのですなあ」

野性味のある外見からくる印象と違って少し卑屈な男なのかもしれない。新助は調子良く、先ほどから感心したように何度もため息を漏らしていた。

「そちらの方は鬼で間違いはなさそうですね」

今度は遙の方に向かってそう聞いた。

「ええ、そうです」

「ははあ。何やらまた印象とは違いますね」

遙が肯定すると新助は、まずじろじろと彼女の頭に生えた角を見ていたかと思えば、何時の間にもやらずいずいと近寄って来て、身体を左右に揺らしながら目を細め、不思議そうに面を見つめて呟く。

「もっと凄いのが居るのかと思ってたんですが・・・」

「あ・・・」

見世物ではないのだ。さすがに遙も参った。後ずさったのは無意識の内で、嫌そうな顔も少し露呈する。

どうにも調子が合わない。

よほど好奇が先行しているのか。新助は「あいや、申し訳ない」と先ほどまでと同じ調子で軽く頭を下げると、我に返ったように元の位置へと戻った。

「申し訳ない。それがどうなっとなるのかと気になって」

「ええ。まあ、皆さん気になさるようです」

これに関してはよくそう言われる。たまたもそうだったし、元親も最初は気になっていたと話していた。三郎も、見せなかつたらあとで同じ事を言つたらう。

手馴れたものである。髪を分け、三郎との時と同じように見せてやる。

「鹿とかと変わらないですよ」

「ははあ……。確かに、見てしまうとそう感じますよ」

この手の疑問は、人なら誰しもが持つことだろう。見てしまえば特に変わった物でもないのだが、知らなければどうなるのかと気になる。

遙は何処と無くやわらかい印象を相手に与えるものだから、相手が安心した場合は大抵これについて聞かれていた。

「もう良いですか？」

「あ、ええ。おかげで旅先での、良い話のネタになりますよ」

新助は嬉しそうに満面の笑みを浮かべて応えた。機嫌が良さそうだ。元親と近い性格なのかもしれないが、根本から印象が違うのは人間性だろうか。

「ところだね。彩乃の奴があんたに会いたいんだそうなんだが、良いかね？」

新助は急に真面目な顔になると、遙の真つ黒い瞳を覗き込んだ。

「私に？」

「なんだろう？」

少なくとも神職に携わる人物との接点は思い当らない。むしろ印象は悪いんじゃないかと遙は考えていたが、旅するうちに見方が変わる事もあるのか。だとしたら、喜ばしい事なのだが。

「十五年前の戦で、あんたら永石と身体張って戦ったろ？」

「あ、ええ。そう聞いてますが、私はまだ幼少だった為に経験はしておりませんよ」

時を十五年程遡るとなれば、永石領内では鉄砲が広く出回り始め、妖怪を領内から追い払おうという動きが強まった頃である。

旧来から土地に住まう妖怪たちとは衝突こそあったが、松谷家は妖怪と友好的な関係を続けてきた。これを頼って後に流れ者と呼ばれる事になる、永石領から追われた妖怪はこぞって松谷領を目指した。

これが生み出したこじれによって両者の緊張は急激に高まり、竹前城と同じく国境付近に位置する帆箆城はしほじょう付近で戦が起こった。悪名高い「帆箆はしほじょうの役」である。八十年にわたって続いた平穏な時が瓦解した瞬間でもある。

当初鉄砲を持たない松谷勢はその威力の前に劣勢を強いられたが、「流れ者」が増えてくると彼らを集め、外見が人と殆ど相違ない者達に甲冑を着せ、将に見立てて矢面に立たせるという物だ。いわば、鉄砲に対抗するべく流れてきた妖怪の力を欲したのだ。

聞けば外道だが、その見返りとして子に棲家を与え、教育し、町奉公の元で代々面倒を見るという約定が交わされた。

永石による追っ手は熾烈を極めており、このままでは滅ぶほかなしとまで悲壮に呉れていた妖怪達である。松谷家には先祖が妖怪の鬼と結んだという伝説もあり、せめて子らだけでもと、当初の予想よりも相当円滑に合致したのだ。

特に屈強な身体を持ち、多くが落ち延びた鬼達は角を落とし、人に扮して戦線に紛れ込み、敵方をよく混乱させた。

結果として戦火は拡大してしまい、安丙あんへいの大寒波が訪れるまでは両家の衝突が相次いだ。

この大寒波にて戦どころでなくなると、両者にらみ合ったまま戦はなし崩しに収束に向かった。それまでに矢面に立った妖怪の数は激減してしまう。また、皮肉な事に彼らの活躍は元から住んでいた

妖怪達が人に与えていた印象も変えてしまい、現在は人ばかりでなく妖怪と「流れ者」との溝も頭の痛い問題となっている。

とはいえ約定は固く守られた。人に近い姿形を妖怪達はそのまま保護され、松谷領で町奉公の元で暮らすか、人里離れた山野で集落を作り、気ままに暮らすかした。遙や縫もいわゆる「流れ者」で、前者に当てはまる。

「ああ、そうか。でもほら、ご両親との血縁も」

「てめえ。いい加減その良く喋る口ぶさぎなよ」

新助のとどまる事を知らない口ぶりは、唐突に縫の怒声が遮った。唐突過ぎて遙も一瞬身を強張らせた。

「黙って聞いてりゃあ、さっきからべらべらと馴れ馴れしく喋りやがって。少しは考えられないのか？ええ？」

「縫。良いよ」

床板を踏み鳴らしながら新助に掴みかかろうとする縫の肩をつかんで、遙は彼女を止めた。

「ああ？」

余程新助に対する印象が悪かったのだろう。普通彼女がここまで頭に血を上らすことはない。大声で騒ぐときは鬱憤を吐き出す意味合いが強く、平静さをなくさないものだが、今回は箍が外れたらしい。止めに入った遙にさえも食って掛かった。

「知らない事なんだから、少し仕方ないじゃない。それに、争いに来たわけじゃないんだから」

「・・・」

とはいえ遙もここで引くわけにはいかない。言い聞かせるように強く訴えると、縫は喉まで出掛かっていた物を飲み込んで細い息をゆっくり吐いた。

「ちっ。お前がそう言うなら、まあそれで良いよ」

納得はしてない様子だったが、状況を鑑みて無理やりに落ち着きを取り戻してくれたようだ。眉をひくつかせて「こいつに感謝するんだね」とだけ新助に向かって吐き捨てた。

縫は思い切り舌打ちすると、その場でどかりと胡坐をかいて座り込んだ。顎杖を付くと、憎憎しげに動く目を見せない為にとつばを向いてしまう。

「ごめんなさい。こんな事になると思ってたんですけど・・・」

「ああ、いや。俺のほうも熱が入っちゃったからなあ・・・」

誰かが怒気を発した場独特の緊張から生まれる、居心地の悪い沈黙が二人にのしかかった。三郎などは脇で肩を強張らせて身を固くしている始末だ。

何という事はないのだが、こういう時はどうにも口を動かし辛くなる。このままではいけないと、遙は一つ咳払いして気分を誤魔化した。

「彩乃さんが会いたがってるという事ですが、私は予定もありませんので大丈夫ですよ」

自分がした問いなにも関わらず、新助は最初きよとんと話を聞いていた。頓挫したとばかり考えていたのかもしれない。

少し間を空けると、一拳に雲が吹き払われて彼の顔が明るくなる。

「い、良いのか？ありがてえ。あいつも喜ぶよ！」

この童のような喜びように、思わず遙も口元が緩んだ。

「彩乃さんは今何処にいらっしゃいます？」

「供養の終わり際に話をしてくるよう頼まれたから、まだ川の近くだと思っ」

「なら、私の方から向かいますよ」

「悪いな。もう終わって待ってる頃合だろう。あつしも一緒に行くよ」

この暑い中、あまり長く待たせては悪い。取り急ぎ仕度をしなければ。。。

遙は握り飯が入っていた籠と水筒を一通り綺麗にまとめると、傍らに置いてあった自分の刀を腰に差した。特に大した物は持っていないから、何も要らぬだろう。

「じゃあ、行って来るよ」

不機嫌そうにそっぽを向いている少女にそう言つと、栗色の目だけが器用にこちらを向いた。あくまで眉根は寄せたままだ。

「はいよ」

手をひらひらと振って、縫は遙を見送った。

河相村編 役行衆（前書き）

河相村にて からの続きとなります。

河相村編 役行衆

遙は一人、北竹前川が運んできた丸い石と土が混じりあうくらいのところに立っていた。

北竹前川は河相村から少し外れて小高い土手を越えなければその姿を見ることができない。

これより少し上流では村のほうへと細い用水が引かれている。下流では南竹前川とぶつかり、そのまま東南に流れ川幅が広くなる。村から離れてしまふし、その先にある久瓦川くがわは松谷家と永石家の国境ともなっているため、人気は無い。

例の廃墟と化した寺というのも、人里を離れるという意味合いがあったのかもしれない。

竹前川は、昨日の雨で少し水が濁っており、増水している。とはいえ上流から下流に至るまでがよく整備され、巨大な城下を始めとして様々な場所に水を取られているのだから、相当な長雨でも続かない限り洪水が起こるような増水はしない。せいぜい土手に届くか届かないか、と言ったくらいである。

故に土手もそう高くは無く、ここからでも補強のために等間隔で植えられた松の木々の隙間から、村に並ぶ家屋の屋根くらいは伺うことが出来る。

川を見ると、所々の流れの変化で穿たれて出来た深い川底があちこちに見受けられる。ここでは濁った水の泡が渦を巻いて大きな口を開けていた。

生き物は水が無くては生きていけないが、一歩間違えればそれに呑まれる。相反した二面性が、そこから顔を覗かせて手招いているようだ。

足元では角が取れて丸び帯びた川縁の石が強い日光を浴び、白っぽく照り返して眩しい。熱気も跳ね返って顔に当るくらいだから、裸足で触れれば火傷を負ってしまうだろうか。

遙がその釣り目を細めて見ると、白い着物によく冴える緋袴を身につけ、傘を被った人物が竹前川に向かって座っている。川縁から水面に両の足を投げ出して、冷やしているのが見て取れた。ああして暑さをしのいでいるのが、新助が言っていた彩乃という巫女だろうか。

途中まで送ってくれた新助とは、ついさつき別れたばかりだった。彼は同行してくれる間、妙に大人しくなった。縫を怒らせてしまった責任感が強かったようで、道中は彼の謝罪の言葉が続いた。

あまり気負う事もないと諭したが、「悪いけど最初一人で行ってくれ。やっぱり、ちゃんと謝ってくるよ」と、縫の元へと引き返してしまった。

あの捻くれ者の事だ。ちゃんと謝罪の言葉を受けてくれるかは定かではないが、真摯に言えば嫌がりながら「もう良いよ」とか言うに決まっている。大丈夫だろう。

新助と別れると、黙って付いてきていた三郎もそれに続く形で別れた。自分からは口を出しにくい雰囲気だったのだろう。あまり同伴して見られるのも、あまり良くないかもしれない。

彼は名残惜しそうだったが、今日のところは仕方ない。しばらくしてほとぼりが冷めれば、顔を合わせて話くらいは出来る。

それに、彼はもうじき成人する。そうなれば町の市にも出るだろうから、いくらでも機会は得られるだろう。自分から屋敷に尋ねて来てくれても構わないのだから。

そんな事をぼんやりと考えながら、遙は硬い石を踏む。一定の間を置いて砂利が擦れあう独特の足音が、自分の耳にも入ってきた。

川で足を冷やし、暑さを凌いでいた巫女装束の女はそれに気が付いたか、少し驚いた様子でこちらへ向き直った。

目線が合うと、遙は軽く頷いた。すると軽い会釈をされたので間違いはなさそうだ。

「彩乃さんですか？」

近づいて彼女の顔を覗くように聞いた。

「あ、はい」

控えめな返事が返ってくる。

驚かすつもりはなかったのだが、川を見ながら物思いに耽っていた様で、心の準備が出来てなかったと見える。「こんな格好で」と言つや、慌しげに布の端切れて足を拭いたり、濡れたままの足で足袋を履こうとしたりと忙しい。

「ああ、そんなに慌てないでください。私の方こそ急でしたから」「すみません」

申し訳なさそうに頭だけを下げると、彼女はきちんと足を拭いて、左右に足袋を履いてから草鞋も履く。自前らしい大きめの水筒は少し強引に帯に差してしまった。時期がらか、帯からは紐でいくつかの水筒がぶら下げられており、これらは少し小さい。

そして最後に、彼女は立ち上がってから傘を取った。

ここで初めて彼女の全容が遙の目に映る。

遙と同じ黒い瞳が特徴的であるが、彼女とは違い丸目で大きい。それ故どこか童から抜け切れてない幼げな顔立ちだ。小動物を思わせるといつても言い。長く伸ばした黒い髪は、背中の方で一括りにしていた。

「付き添いの者から聞いたかと思いますが、私は彩乃と申します。渡り巫女です」

彼女は姿勢を正すと、深く頭を下げた。

「私は茂元遙です。どうぞよろしく」
遙もそれに習う。

が、その後互いに何を話して良いのか解らず少し間を置いてから、
「あ、すみません。私が我がまま言ったのに」
と、彩乃は照れくさそうに笑った。遙もそれに釣られる。。

「緊張されています？戸惑われたかもしれませぬ。神職に関わられる覚えはないと」

「あ、ええ。失礼ながら」

心を見透かされた気がして、遙の声が少し上ずる。彩乃はそれに

対して上品な笑みを見せた。

「いくら神託を授かるとはいえ、心までは覗けませんから安心して
くださいね」

「すいません。変な事を考えてしまつて」

「いいえ」

神職というだけで、どうにも無意識のうちに身構えてしまつたものらしい。表情が硬くなつたのかも知れない。

「急なお話ですけれど、わざわざお越しいただいたまで応じて頂いて。なんとお礼を言えば良いやら」

「いいえ。私の方は午後の予定も無いですから」

それは良かったと、彩乃は安堵したように胸に手を置いた。

随分柔らかい物腰の女性だ。失礼なようだが付き人の新助の性格からは予想だにできず、彼女の調子に吞まれてしまいそうになる。

「今日は、貴女方にお礼がしたくて」

「お礼？」

遙は思わず口元に手をやって考えた。

間違いなく彼女とは初対面だし、神職に関わつた覚えも無い。お礼を言われる筋合いは、どう考えても出てこなかつた。

「ええ。私が、こうして各地を回れるようになったお礼です」

彼女の中では、感謝の念を裏付ける理由があるらしい。一呼吸置いてから、彩乃はゆっくりと話し出す。

「今となつては巫女ですけれども、そもそも神託を得ることは全員に出来るものではありませんので、私が生まれた村で、私は特異な目で見られて育ちました」

通力は、誰でも持てるものではなく、生来の素質が大きく物を申すと言う。あまりに顕著だと、確かに特異な目で見られる事があるかもしれない。農村などでは特に顕著だ。

「そんな折に帆笥はふしの役が起こつてしまいますと、私のような人間もあまり良い目では見られなくなつてしまいました」

遙の顔に暗い物が差す。

「ああ、そんなに気を遣わないでください。私の方こそ、こんな話をいきなりしてしまって・・・」

すぐさま彩乃は気を遣ってくれるが、唐突にそんな話をされれば誰でも深刻な顔をしてしまうのではないだろうか。

十五年前といえば、彩乃は幾つだろうか。二十歳を越えてはいそうだが、まだ両親が恋しいくらいの幼少の頃だろう。そんな時機に、そんな過酷な状況に置かれてしまった彩乃を思うと忍びない。

「へ、変ですよ。そうですね。会って間もない相手にこんなお話ししてしまうなんて」

余程深刻な顔をしてしまったようだ。あれほど落ち着いた雰囲気纏っていた彩乃が唐突に早口になって、弁解とも謝罪ともつかない言葉を次々と口走った。

どうにも慌しい女性だ。何がしかに焦ると、こうした地が出るのかもしれない。さつきも随分慌てて足袋を履いていた。

「いえ。気にせず最後まで話してくれませんか？」

なんだか悪いことをしたような気にもなってきた。ひとまず驚きは胸の内に押し込めておいて、少々覚悟して聞かなければならまいと、遙は身構えた。

「ごめんなさい。ええと」

「？」

少し、彩乃の目が竹前川の方に泳いだかに見えた。魚でも跳ねたろうか。

「それからは、ですね・・・」

波立った心中がまだ落ち着いていないのか、集中が途切れてしまったのか。先ほどまでの流暢なそれとは打って違って、彩乃はぎこちなく言葉を紡ぐ。

「少し人里を離れようかと思った矢先だったんですけれども」

乾いた音が木霊した。

心の臓が跳ね上る。彩乃も驚いたようで、大きい目を更に見開いている。

遙は弾かれたように音がした方角へと向き直った。土手を隔てた先にある、河相村の方からだ。

先述の通りここから見る河相村は家屋の屋根を見るのがせいぜいだが、そこに止まっていた鳥達が驚いて一斉に羽ばたき、空へ逃れていく影は十分に見て取れた。

背中に冬の井戸水でも注ぎ込まれた心地だった。

気のせいではない。以前から脳裏にへばりつき、二度と聞きたくないと思っていた音。

鉄砲を発砲させた音だ。

鉄砲は永石領内でしか出回っていない。

それが、何故ここに？

「彩乃さん！今　っ」

音は一つだったが、村のほうに心配だ。遙は、殆ど怒鳴るようにして彩乃に村へ向かう旨を促そうとして振り返る。

が、眼前に何かが飛んできた。咄嗟の事で何かは解らないが、思わず右腕をかざして防ぐ。

「っっ」

軽い衝撃伝わりと共に、ひどく鉄臭い何かが顔にかかった。袖が濡れて冷たくなった。

からんと、それは遙の足元に転がった。見れば、先ほどまで彩乃が持っていた太い竹を使った水筒だ。

本来水が出てくるはずの口からは、中に残っている赤黒い液体が流れ出ていた。水よりもとろみを持ったそれは、今も白っぽい砂利を汚して気味の悪い水溜りを作っている。

何かの血だ。そう結論に至ると、唐突に気分が悪くなった。

「ちっ。あいつ、独りでやれっ事か」

彩乃が悪態をつく。

驚いて地面から目界を上げれば、後ろもみないでゆっくり距離を開けている彩乃が、獣と対峙した獵師よろしく、油断無い視線でこちらを見ていた。

人を見る目ではない。

胃の奥に手を入れたような感覚。

銃声に次いで、あまりにも顕著な彼女の豹変ぶり。状況が全く飲み込めず、息が荒くなった。急激に湧き上がってきた不安感もそれに貢献する。

「まあ、こんなのなら・・・」

彩乃は一度大きく深呼吸して、自分に言い聞かせるように静かに呟く。後半は小さくて、聞き取れなかった。

「どういう・・・」

あの柔らかい印象を持った彩乃は何処へ行ってしまったのだろう。言っていることの意味も図りかね、遙は答えを貰いたくて思わずそうつ口走っていた。

「どういう事って？」

混乱と緊張から強張って動けないでいる遙の前で、ようやくと彩乃との会話が成り立った。彼女はそれ以上語らなかったが、行動で答えを示す。

足元の砂利をつま先で少し掘る。そこからは厚手の布の端らしき物が出てきた。

当惑する遙を尻目にそれを引っ張ると、砂利の中からずるずると一枚の布が引きずり出された。予め、上から見ても解らぬようにと埋められていたのだ。

隠されていた道具が姿を現す。

刀と脇差一振りずつ。そして、弓と矢筒だ。

巫女が使う道具ではない。

「こつという事」

彩乃は手早く弓と、矢を一本だけ拾い上げると、遙に狙いを定めて弦を引き絞る。

この時、明確な殺意が彼女の双眸に宿った。

それに後押しされる形で、遙はようやくと判断がついた。

刀の柄を握る。

時を同じくして、矢が放たれた。

鋭利な矢尻が空気を引き裂く音は一瞬。続いたのは、耳をつんざく金属音だ。

「へえ。この距離でも目で追えるんだ。流石に化け物か。人とは違うね」

両者は三間（約5.5メートル）も離れていない。こんな至近距離で真一文字に自分の眉間目掛けて突っ込んでくる彩乃の矢を、遥は眼前で叩き落としていた。

それを見た彩乃は驚いたというより、わざとらしく感心した風であった。化け物という言葉を強調して肩をすくめてみせた事から、そうした事が伺える。

この距離で矢を落とされた事へ対する落胆や焦燥の色は無い。

「彩乃さん・・・」

「やめてよねその呼び方」

しつこい醜男に言い寄られている時の顔で、彩乃は吐き捨てた。

「何で、こんな事を？」

「何？わざわざ理由を聞かないと納得できないわけ？」

先ほどから何を解りきつたことをそう何度も聞くのかと言った様子で、食い下がる遙を苛立たしそうに彩乃は一蹴した。

遙はぐつと押し黙る。それを見て気分が上向いたか、彩乃は低く喉を鳴らした。

「私は一時たりとも、化け物と同じ空気を吸っていたく無いの」

子供に言い聞かせる調子で言いながら、彩乃は堂々と矢筒を背負う。慣れた手つきで今一度、矢を番えて遙に狙いを定める。

日の光を照り返して、鋭い矢尻が光る。

まともに取り合う気が微塵も無いという拒絶の言葉を受けた遙は、一つ息を吸うと目つきを変える。柄を握る手に力が入った。

付き人という新助も彩乃の手の者だろう。銃声の事もある。

縫が心配だ。

遙はいつ飛んでくるか解らない矢を見据えて、静かに刀を構えた。

自然と腰は座り、背筋は伸びる。上体に力を凝縮させているのだが、肩の力は抜けていた。見る物が今の遙を見れば息を呑むだろう。それほどに、武術において最上の体の使い方を、彼女は覚えていた。「止めね」

とまれ、それは何の役にも立たなかった。

「？」

何の前触れも無く、彩乃は弦を引き絞るのをやめてしまった。矢を番えてこそいるが、一気に踏み込めば刀が届く距離だ。その姿勢のまま肩さえすくめて見せた。

逆に、遙は動けなかった。まだ何か隠しているのかと、周囲に気を配る。

「随分警戒してる割には、気付かないのね」

彩乃は満足げな嘲笑を浮かべた。

この余裕と自信は、何処から湧き上がっているのだろうか。不安が戦慄となって身体中を駆け巡る。何か、とんでもないことに気付いていない。そんな気さえした。

遙の背筋は薄ら寒くなるが、昼過ぎで気温は上がっている。彼女の額から伝ってきた一筋が、眉間を通って光った。

遙の瞳は、面白いように泳ぐ。

それが、黙っていれば美しい面に嘲笑を張り付けている彩乃を捕らえたとき、ぴたりと止まった。

違和感に気付いたのである。

彩乃の目が、遙を見ていなかった。

彼女の視線は若干ずれており、遙の肩を飛び越してその背後に向けられていた。

今遙は、彩乃が動いた影響によって自然と竹前川を背にして刀を構えている。

「！」

悟った頃には身体が動いていた。水面が弾けた。

背後から跳ね上げられた水の飛沫が細かい陰を作る。

振り返り様、自然と視界が上へと上がった。竹前川の水面から飛び出してきた巨大な殺意の塊が、頭上から叩き下ろされる。

それが何か判断をする間も無く、遙は地を蹴って、真っ直ぐ右へ身体を投げ出した。

不気味な唸りを響かせながら、先ほどまで自分が居たところに巨大な何かか打ち下ろされた。

砂利が爆ぜる。

腕を眼前にかざして目を守ったものの、鋭利な内の一つが遙の額を切る。そのまま地面に倒れこむと、打ち付けてしまった身体の右側が痛んだ。

上体だけでも咄嗟に起こすと、その巨体を見上げた。

多量の水を押し上げながら出てきた異形は、身の丈二間（約360cm）はあるうかという巨体だ。

箱形にまとまった全身にこげ茶色の殻を纏い、体に四対の歩脚を持つ。前端には先ほど打ち下ろした一对の大きな鋏。

川に生息する人を食らう妖怪。化け蟹である。

遙にとっては、目の当たりにするのは初めてだった。しかし一目見ただけで解るほどに様子がおかしい。

食用にされる蟹と同様、大きな特徴であり、最大の武器であるはずの鋏は遙から見て右の一本だけしか無い。もう片方はまるで自ら落としたかのように根元から消失していた。

四対の歩脚も、左右で一本ずつ不ぞろいに無くなっている。これではまるで、天敵に襲われた後さながらの姿である。

また、色彩が斑な殻には見覚えがある上、あちこちに刺さっている矢はまだ新しそうである。

はたと遙は思い当って、彩乃の方に目をやった。

案の定、余裕の表情で遙を見ていた彼女は「良いことに気付いた」と書いている顔を向け、満足そうに嗤った。

化け蟹退治も供養も、全ては虚構でしかなかった、という事か。

「っ」

再び襲い来る、風を切る唸り。

化け蟹が鋏を突き掛ける要領で、遙に一撃見舞おうとしてきたのだ。

遙は立ち上がると共に、再び地を蹴った。今度は先ほど逆の左方に向かってだ。こちらには鋏が無い為、少しは余裕が出来ると考えた。

鋏は虚しく砂利だけを抉り、下に埋まる砂を少し掘り返しただけだ。そこに遙はいない。鋏が無い方へと体勢を崩すことなく回り込むことが出来た。

化け蟹の胴はがら空きなのだが、遙は一度距離を置こうとして反撃は諦めた。

近くに川があつては自由に移動が出来ない上、川に引き込まれることになったとしたらまともに抵抗も出来ない。今は、川より離れることが先決だ。

川とは反対の方角に、遙は駆けた。途中、彩乃の動向も目にしよと一瞬だけ目界を逸らしたが、彼女はいつの間にか刀を差し、矢は番えるに留める程で様子を伺っている。

この余裕が何処から出てくるのかと、遙は不思議でならなかった。獣程の知能しか持たない化け蟹に、人と妖怪の区別が付くはずも無し。いつ襲われるか、解つたものでもないだろうに。

そんな遙の心情を察したりするはずもないだろうが、化け蟹は立ち止まって両者を見比べる動きを見せる。そして、彩乃の方へと向き直った。

これを見て、彩乃は番えていた矢を口に銜え、右手を開けると腰にぶら下げていた小さい水筒のうち一つを取り上げた。栓を器用に片手で外すと、勢い良く自分の周囲に中身をばら撒き始めた。

見たところ、水のようなだ。

「!?!」

遙が目を見張る。

彩乃の姿が、おぼろげに霞んだのだ。

何が起こったのか。

推測する暇は与えてもらえない。

進路を変えた化け蟹が、遙の視界の端に入ったのだ。

陸に上がったても鼻が効くのか、目で見て怪我をしているとでも考えているのか、はたまた単純に、彩乃を見失ったのか。化け蟹は、

その場で向きを変えると、わき目も振らずに遙を追って迫ってきた。遙は深く息を吸って、再度腰を据えて刀を構えた。巨体には似合わぬ俊敏さで迫る化け蟹と、その背後でおぼろげに姿を霞めた彩乃が、再び矢を構えるのが真っ黒い瞳に写る。

彩乃は狙ってくる様子は無い。潰し合わせることが目的だろう。

遙は歯噛みしながら、化け蟹の初動を探る。既に寸での距離まで肉薄してきた化け蟹は、勢いそのまま横薙ぎに鋏を打ち払ってきた。

狙いは頭。遙は、身を屈めてやり過ぎす。

太い棒を思いつきり空振りした時と同じ音が、遙の頭上を通過した。それが自らに向けられていると思うと薄ら寒くなる。逃げ遅れた長い黒髪が数本巻き込まれ、引きちぎられた。

化け蟹は隻腕のためか勢いが乗りすぎたのか、身体の振りが大きいように感じた。先ほど同様、化け蟹の正面がから空きになった。

今度は思い切って、懐に踏み込んだ。そのまま鋏が無くなっていく左手に向かって駆けると、特に脅威となるものも無く後方へと抜けることが出来た。

振り返りざま殻が薄そうな部分を目掛け、切っ先を突き出した。

衝撃だけが柄に伝わった。何かを斬る手ごたえは無い。

化け蟹の殻は、薄そうに見えた箇所においてさえ、あたかも大鎧の胸板を正面突いたが如き硬さを持っていた。刃は通らず、弾力のある刀身が曲がって力を逃がす。

慌てて刀を引くと、歩脚を動かして化け蟹がこちらに振り返ろうとしている所だった。急ぎ化け蟹と同じ間で同じ方向にぐるりと回り込み、目界に入るのをやり過ぎす。

遙が刀を突いた衝撃から位置を察した化け蟹は、動きを止めて鉄をいざ振り下ろさんとした。とまれ、遙の姿はそこに無い。

動作は俊敏だが、視界は狭く反応は鈍いのもかもしれない。

今度は反対方向へと、化け蟹は回りだした。再三同じ事を繰り返すようだが遙はそれに習う。

すんなりやり過ごせた。

かように裏はかける。しかし肝心の刃は通らない。いわば、隙間の無い具足を纏った鎧武者と言ったところか。

苛立ちから遙は奥歯をかみ締める。ひとまず見てくるだけと、軽い気持ちでろくな備えもせず刀しか持つてこなかった事を今更悔いた。

縫も同様である。今頃どうしている事か。

ちりちりと、火に近づき過ぎた時の熱気よろしく、肌を刺す感覚が膨れ上がったのはその時である。

そちらに目をやって、考える前に手が動いた。

衝撃が伝わり、余計な力が加わった矢が回転しながら後方へ飛んで行った。

なんとか防げた。そう認識した頃には体がかつと熱くなって、汗が噴出した。

彩乃が狙っていたものだ。ぞつとする。

潰し合いを謀った以上手を出さないのではないかと言う甘い考えに救われていたが、この瞬間それが無くなった形になる。

動揺と追い詰められていく焦燥感が、遙の頭を麻痺させた。

身体を回転させようとした化け蟹の歩脚が、遙の目と鼻の先まで動いていた。はたと気付くと、神経が敏感になっている彼女は驚いて過剰な動きで身を引いてしまう。

この焦りと砂利が足に絡まって、身体の均衡を失わせた。遙が尻餅をついた頃には、化け蟹の方が彼女を前面に捕らえていた。

目が合った。化け蟹に瞳は無いが、そう感じる。

急いで手を突いて身体を起こし、鉄から逃れようとした。なりふ

り構っていられなかった。鋏が振られる気配を背に痛いほど感じながら、遙は一目散に逃れようと懸命に足を出す。

思わず目を瞑る、背中に鈍い痛みが走った。

「いっ……」

食いしばった歯の間から呻き声が漏れる。次いで、鋏が地面を穿った際に弾け飛んできた小石が足にぶつかってくる。

鋏は遙の背中を撫でる形となって通り過ぎた。掠った程度でこれだ。うるさい位胸の内が高鳴り、臓腑が口から出てきそうだった。

つんのめって倒れそうになるのを懸命に我慢すると、遙は振り返って飛び退いた。反転した視界では、既に数歩距離を置かれた化け蟹が彼女を見据えながら鋏を持ち上げた所だ。

「はっ……はっ……」

荒い呼吸を繰り返すものだから口の中がからからだ。喉も渴いて痛いくらいだった。

その場で腰を落として刀を構える。気を紛らわそうと、遙は生唾を搾り出して飲み込んだ。

化け蟹は、再び鋏を振るおうと歩脚を動かし、巨体を動かし始めた。それを見ながら、彩乃の方にもちらりと目をやる。

おぼろげだった姿は、今や元通りだ。矢は、番えているだけで狙っては居ない。

遙はまた化け蟹に目を戻した。勢いに任せて鋏を振ってくるつもりだろうか。見せ付けるかのように、大きなそれを振りかぶりながら歩いている。

刀の刃は、あの殻に通じない。

距離を取りすぎるか、隙を見せれば矢が飛んでくる。

近づきすぎて歩脚の一本にでも絡め取られれば、上に乗られる。

政重が居たなら、どんなに心強い事か。

今は屋敷で待っているあの大人が、持ち前の怪力おおびとで金棒を振るう姿が脳裏を過ぎった。

遙は唇を噛んだ。今は、自分独りでどうにかするしかないのだから

ら。

ここは一か八かである。

遙は刀を鞘に納めた。この方が早く走れる。

化け蟹が肉薄する。相手が武器を納めた事を理解できるかは不明だが、ここぞとばかりに大振りしているようにも見えた。

向きは、縦振りである。

振り下ろされるそのときを見定め、遙は動いた。

今度はあえて右を選ぶ。

地を蹴った。

何度聞いても慣れないだろう風の唸り声が、すぐ目の前を通り過ぎ、遙の前髪を揺らす。

少し遅れて後方で地面を叩く衝撃が足裏に伝わった。

両手を使って爆ぜた砂利から顔を庇うが、一つが抜け出る。唇が切れた。

目をしかと開けたまま両手を退かして化け蟹の動作を見ると、目の前にある歩脚の一本が、踏み込むような動きを見せた。

「！」

遙は息を止めると、目を瞑るのを我慢してしゃがみ込んだ。間、髪を容れず、その頭上を鋏が通過して行った。

化け蟹が、一回振り下ろした鋏を腕が自然と動く左方にへと薙いで来たのだ。今度は左方を化け蟹が警戒するだろうという危惧は、無用だった。

とまれ、危険を冒した甲斐はあった。片腕を無くして抑制が効きにくくなった巨体は、腕を振り終わった時に少しぶれる為、大きな隙が出来る。

遙は一気に化け蟹の鋏を潜って、背後に回りこんだ。

「っせ！」

化け蟹の死角へと回り込んだ遙は、一声気合を入れると、歩脚の一本に右手をかけ思い切り地面を蹴った。

勢いを生かして宙に浮く。空いた左手で殻の凹凸を掴んだ。

この情け容赦なく照りつける太陽がここで幸いした。比較的濃い色合いをした化け蟹の殻は日光で照らされて、半濁きの状態になっている。無理に力を入れて腕を引くと、どうにか滑ることも無く、身体を化け蟹の背中へと持ち上げる事が出来た。

化け蟹の背中へ、あたかも大きな岩のようである。大きな凹凸もあり、一度乗っかってしまえば手や足をかけるには不自由しなかった。

すぐに異常に気付いた化け蟹は、激しく身を揺する。

ここで振り落とされれば、せつかくの努力が水泡に帰す。両手足を凹凸や棘に押し付ける格好で踏ん張って、遙は耐えた。

しばらくそうしていると、振り落としかどうか確認するつもりなのか、化け蟹は振り返ろうとして器用に歩脚を使い、ぐるっとその場で回り始める。

まだ遙が取り付いたままだという事には気付いて無いらしい。

髪や爪同様、殻に感覚は無いものということか。小柄な身体も幸いしたかもしれない。

それ故激しい揺れは収まった。これを機に、遙は化け蟹の背中を一気によじ登り、頭部がある頂へと登り詰める。

この動きで「まだ居る」と気付いた化け蟹は、再度身を揺すつたが既に遅し。遙は既に頭部でしっかりと殻を掴んでいた。

化け蟹を正面から見て人の顔に見立てるなら眉間に当たる所か。左右には瞳の無い大きな目が位置する。

再び襲い来る大きな揺れ。遙は四肢を踏ん張らせて凌ぐ。

しばらくして動きが収まると、遙は脇差を鞘から引き抜いた。腕を振り上げると、柄頭を思い切り化け蟹の殻に向かって叩き付け、これを破ろうとする。

これには化け蟹も危機感を抱いた。これまでとは違い、がむしやらの動きで暴れ始める。

「あっ！」

遙の足が滑った。

身体が木の葉の如く宙を舞った。どうにか手だけで？まり、落とされることはなかったが、遙は何度も化け蟹の背中に叩きつけられてしまった。

背中の凹凸部分に引っ掛けられて皮膚が破れ、膝など骨ばった部分には鈍痛が走る。

体重を支える腕が限界を迎えつつあったが、それよりも先に化け蟹の体力が潰えたようだ。動きが緩慢になると、息を付くかのようにならざるを得ない。動きを止めた。

これを逃さじと、遙は殻を突き破るべく腕を振り上げ、こちらも動きを止めた。

今一度見ると、叩いた箇所は白くなっているが粉がふいている程度だ。無我夢中で気付かなかったが、ひびも入っていない。これでは金槌で石を叩いているような物である。突き破ることが適うかどうか。

「うっ！」

甲高い音が耳に入ってきた。

咄嗟に遙は腕を下ろして身を小さくする。

文字通り紙一重の所を、彩乃が再度放った矢が通り過ぎたのだ。動きがなくなつたので狙いを定めたのだらう。

どうすればいいだらうか。

矢に狙われたことで、一層遙の焦燥が駆り立てられる。焦ってはならないことは頭で解っているのだが、興奮していて自制が利かない。まとまりが無い思案が脳裏に浮かんで消えていく。

どうしたら良いか。半ば混乱に陥った遙を尻目に、体力を取り戻した化け蟹が再び歩脚を動かした。

と、おもむろに向きを変えた。

「？」

化け蟹は彩乃に狙われたと考えたのか、彼女の方に向き直っていた。背中は斜めになっているため、遙は彩乃から隠れる形となる。

少し顔を上げて前を見ると、あの水筒に手を伸ばす彩乃の姿が目

に入った。おぼろげに霞んでいない彼女は今、化け蟹の視界に捕らえられたのだらう。

今なら、矢を撃つとしても時間がかかるはずである。

遙は手に持った脇差を逆手に持ち替えると思いつて身を乗り出し、掲げた刀身をあらん限りの力を込めて振り下ろした。

狙いは化け蟹の眼球だ。

ほぼ唯一と言って良いほど無防備なそこはさしずめ、大きな魚卵といった感じだった。

最初、硬い膜に刃が当たる抵抗こそあったが、その後は先ほどまでの苦労をあざ笑うかのように易々と刃を通した。

化け蟹が、跳ねた。

相当の苦痛が伴うのだらう。遙の腕までを飲み込んだ眼球から白濁色の液体を涙に似せて流し、身を打ち震わせたのだ。

遙の身体を支える左手に力が入る。爪がはがれるかもしれなかった。

落とされぬ内にと、遙は急いで右腕を引き抜いた。脇差の柄を銜え、右手を空けると、再びそれを薄皮の裂け目へと埋没させた。

押し込むたびに気持ちの悪い液体があふれ出てくる。平時なら憚られるそれをもともせず肘まで腕を潜り込ませると、遙は手の平で炎が起こした。

外からは見えないが、遙は自分が出れる範囲でもっとも大きな怪火を作り出していた。同時に、吸い込まれるような脱力感が彼女を襲う。

瞬きする程の間であった。

遙が弾けさせた怪火は、化け蟹の眼球内で猛り狂った。周囲を巻き込んで焼き、髓脳ずいのうまで達する。外からでは、化け蟹の空いた口から青白い炎が垣間見えるだけに過ぎないが、これが決め手となった。

巨体は早くも痙攣を始める。

立つのもやっつという有様で、歩脚をあちこちへと意味も無く踏み込み、口からは茶色い物をばしゃばしゃと垂れ流した。

これは吐しゃ物に当たるのか、凄まじい悪臭が辺りに充満する。言いようの無いそれは遙の鼻腔につき、ぴりぴりと痛ませるほどである。

そうした抵抗も虚しく、化け蟹はやがて糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

腕を埋めたままの遙は衝撃で落ちずに済んだが、必死に押し殺していた疲労とたるさのツケが此処で回ってくる。何も出来ぬまま化け蟹の背中に激しく胸と腹をぶつけ、肺腑から空気が押し出されてしまい息が出来なくなった。

とまれ、安堵してる間など無い。

そうこいしている内に、彩乃が弓を引き絞っているのを、視界の端で捕らえたからだ。

頭が重い。気を許せば視界が暗転しそうな中で、遙は埋没させた腕を引き抜くと、すぐさま化け蟹の死骸に身を隠すようその場から逃れようとする。

「ぶぐ・・・っ」

空気を欲しがる体から呻きと共に息が搾り出される。

左の肩辺りに、何かが触れた。骨が肉の中で震える不思議な感覚。しばし遅れて激しい灼熱感が走った。

遙の左肩から矢が生えていた。

もたついているつもりは無かったが、彩乃が先ほど構えていた矢が当たったものらしい。

これを受け、遙の視界が一瞬真っ暗になった。

宙に浮いているような感覚。限りない空間を落ちていると言っても良いかもしれない。身体感覚が途絶え、なすがままになった。

手足から力が抜けた遙は、仰向けとなって化け蟹の背中を滑り落ちた。足が地面に触れるか触れないかといった所で、感覚が戻ってきた。

不器用に足を着いて、正面から砂利の中に突っ伏すことは避けた。受身こそ取れないものの、なんとか右肩の方から化け蟹の陰に倒れ

こむことが出来たのは、僥倖だろう。

まず遙は思い切りむせた。

化け蟹に揺さぶられている間は、殆ど息も付かずに両手でしがみ付いていた。ようやくと空気を貪ったところ、渴ききった喉が追いつかなかったのだ。吐き気すら催した。

「うう・・・」

口元まで手が行くが、大丈夫だった。

無理やり呼吸を落ち着かせると、口から落とした脇差を拾ってまた柄を銜えた。今度は奥の方でしっかりと。

腹に力を入れて、また息を止めるとゆっくりと肩に刺さった矢を引き抜く。

「いつ、痛う・・・」

痛みで銜えていた脇差を取り落とす。甲高い金属音が響いた。

矢尻は骨で止まっていた。先は刺さったかもしれないが、中には残らないで綺麗に抜けた。

息をつくくと、額から珠の汗が噴く。

矢はすぐに抜かなければ肉に食い込んで取れなくなる。まずは安心と、遙は悪態をつきながら抜いた矢を折ってぞんざいに放った。

着物が破れた部分から傷口を覗くと、鋭利な切り口の奥に骨が見えた。縫えばしばらくして塞がるだろうがそうも言ってられない。

遙は大襟から右手を突っ込んで傷に触れた。ずきりとした痛みに全身が強張る。

顔をしかめると、そこで怪火を起こし、すぐに消した。

覚悟こそしているが、開いた口からは悲鳴が漏れた。過剰に敏感となった左腕全体が震える。自分の血と肉が焦げる臭いは、鼻が麻痺していて解らず、気分が悪くなることは無かった。

「・・・良し」

ともあれ、血は止まった。遙は脇差を仕舞うと、化け蟹には通じなかった打刀を日の目に晒した。

刀身に、酷く疲れた遙の顔が写り込む。

肩も使って大きく深呼吸し、意を決する。
化け蟹の陰から飛び出した。

すると、待っていたとばかりに彩乃が放った矢が飛んでくる。
近い。

彩乃は、遙が化け蟹の陰に入っただけであれこれしている頃から近づいて来ていたらしい。威力と速さ、そして命中率とが相成った矢が、まっすぐに向かってきた。

とまれ、目で追えた。

刀が矢の横腹を捕らえて力の向きを変える。矢はそのままあさつての方向に回転して行った。

遙は間、髪を容れず、一気に距離を詰めようと地を蹴った。

彩乃が矢を番えて狙いを定めている間には、懐にまで迫れると踏んでいた。

「っ！」

そうさせじと、すぐに次の矢が飛んできた。

これも件の如く弾いたまではよかったのだが、彩乃が予想より遙かに速く矢を射るものだから、腰が引けてしまった。遙の身体の重心がふらつく。

姿勢を正す合間に放たれた第三射目。まともに足を進めることも出来ずに、今度は身を振って避ける。

右袖に穴が開いた。今日何度目になるか解らない冷たい汗が、遙の背を伝う。

この時既に遙は、妙な違和感を覚えていた。

彩乃が矢を射る速度が、いくら近いからと小さい構えで撃っているにしろ速すぎるからだ。そのくせ、出鱈目な乱射でもなく、恐ろしいまでに軌道は正確だ。命中率を上げる為、胴の中心を目掛けて飛んでくる。

これではまるで。

「まさかって、顔してるわね」

今一度、矢を見定めてから打ち払おうと腰を落とした遙に浴びせ

られたのは、矢や獣の血でも侮蔑の言葉でもなかった。
もつとも、その奥に底知れぬ黒い物が孕んであったが。

「あんな立派な町に、屋敷構えてのうのうと住んでるんだもの。そろそろなんとなく、察しがつくんじゃない？」

確信を僅かに反れる言葉を口にして、彩乃は弦を引く。

彼女の両手の輪郭が、ぼやける。

遙は目を瞠った。見間違いでは無い。

今確かに、彩乃の両手が陽炎のような物に包まれた。彼女は弦を、息する事のように軽々と引き絞って見せる。

続く弓音。

「っせ！」

遙は鋭い呼気と共に、何度目になるか解らなくなってきた矢を打ち落とした。

そして、心中で明確になった答えを口にした。

「役行衆・・・！」

「正解」

彩乃は物分りが悪い教え子を諭す、寺小屋の師範の顔をして遙の言葉を肯定した。

役行衆。

まさかこの場で出会おうとは、遙は思いも寄らなかった。

かつて妖怪と対立し、滅ぼさんとした志を持った豪族や、有力農民が永石家領内で結成した一揆だ。

その性質上、よく通力等に精通している。故に、永石領内での妖怪退治が決行される場合、心強い雇い兵といった程だったという。

しかし北の異国^{カレ}枯威武^{イウ}と独自に接触し、輸入した鉄砲を研究、生産し始めた頃から急激に力を付け、帆笥の役ではその名を国内外に轟かせた。現在の規模は不明である。

「最初理由に拘ってたから、教えてあげる」

かの集団は怨恨を基盤としているという。彩乃は不倶戴天の仇を討とうとしており、そこに付け入る隙など無いだろう。正体を明か

したのは、生かして返すつもりは無いという暗喩か。

遙の顎から血と汗の混じった粒が落ちた。彼女の目据える前で、相変わらず彩乃はその細腕に似合わない早業で弦を引く。

それを見て遙も動いた。

矢は直線的な動きをする。手の動きも予め見えていたから、横に動いて難くかわせた。

遙はそのまま、少し緩急をつけながら彩乃の周囲を回るように移動した。

不規則に動けば、いかに達人とはいえ、初めて会う相手の動きを予想して当てるなどもはや芸当に近い。年齢からそういった技術は考えにくいだが、用心に越したことは無い。

初見であるが、恐らくあの陽炎や姿をおぼるげに掠めたあの水筒の中身まで、役行衆が以前に編み出した通力というやつの一部だ。それ以外、思い当たる節は無いし、思うことで少しでも不安が拭える。

あの陽炎に至っては最初は見受けられなかったから、単純に使ってなかったのだろう。もしかすると怪火同様に体力を使うのかもしれない。

どうにか付け入る隙が無いかと見定めながら、遙は徐々に彩乃の外側に描く円を狭めていった。これに気付いた彩乃は、構えを小さく取って矢を番えた。

弦を引く手に陽炎が宿る。

遙は急いで、このまま懐に入ってしまったおうと意を決した。

彩乃の右手が動く。矢が放たれる直前とも直後とも形容しがたいこの時を狙い、遙は横方向へ進む勢いを瞬時に殺して、前へと進んだ。

矢は、あさつての方に飛んでいった。

砂利が草鞋の下で空回りして足首が痛む中、遙は強引に足を前へと運ぼうとする。

とまれ、彼女は急いでいた。彩乃にとっては、二の矢を放てるく

らいの間はあつたのだ。

取り急ぎ、だが正確に、彩乃は二の矢を取り出す。
遙もそれに感づいた。

今度は立ち止まらない。その勢いを保ったまま、片手を柄から離して怪火を起こし、彩乃に向かって投げつけた。

彩乃は遙の大胆な行動に大きな目を更に大きくしたが、それも少しの間。ある程度は見越していたか、手に持った矢をその場に落とし、弓を両の手で握って身構えた。

怪火が肉薄する。

彩乃は鋭い呼気と共に、間を合わせて弓を怪火にへとぶつける。
小さな青白い火球は爆ぜ、それらは彼女に害がない方向へと飛散した。

こうされる内に近づけた遙は、その勢いを乗せ、美しい波紋が浮かぶ刃を彩乃の肩口目掛け切り下ろした。

それをさせじと、刀を真正面から受けた彩乃の弓は、その身に刃を少し食い込ませて主を守る。この際刃に触れた弦がぶつとりと切れてしまった。

これで弓は使えなくなった。

弦を張りなおす手間など与えさせてなるものかと、遙は弓を引き斬ってしまおうと手に力を加えようとした。

彩乃の両手に、再び陽炎がもやをかけたのはその時である。

「やっ！」

「！」

彩乃の勇ましい呼気と共に、予想だにしない膂力が真正面から加わった。これ程とは心にもなかつた遙の刀は、易々と押し戻されてしまう。

仰け反る遙を尻目に、彩乃は素早く矢筒に手を伸ばす。

彩乃の背に隠れた手が出てくる際には、残っていた矢が数本、彼女の手中に入っていた。

恐ろしく短い槍に見立てたとも言おうか。これを、彩乃は遙の

胃の辺り目掛けて突き込んできた。

彩乃の膂力に驚いていた遙は、なんとか身を捻ってかわそうとしたが、右肩を少し抉られた。鮮血が飛まつとなって宙に踊る。

鮮やかなそれが地面に落ちる前に、遙は押し戻された刀を再度振り下ろすが、矢を自ら落とした彩乃が素早く引き戻した弓に再度阻まれてしまった。

刃は再び弓に食い込んで止まった。遙が踏ん張ると、彩乃もそれに続く。彼女の両腕には件の陽炎が宿り、おおよそ想像し得ない力強さで遙の刀を押し返そうとする。

両者の間で押し合いが始まった。遙の色白い顔には朱が差し、彩乃の両腕に宿る陽炎は大きくなった。

驚いた事に、単純な力比で両者は互角だった。

遙は妖怪の例に漏れず、種として持ち合わせた怪力にあやかっていた。たいてい、人の男ごときには引けを取ったことが無いのだが、この陽炎にかかれば同程度の膂力が得られるという事なのか。気後れをすれば、また押し戻される。何がきても不思議では無いと自分に言い聞かせながら、遙は刀を食いしばって刀を押す。

彩乃の方も、あの高飛車な表情が消えて苦しげだ。前髪が濡れて額に張り付いている。

転機は、何かが折れる音で訪れる。

音の発生した元は、彩乃の手元だった。

見れば、刀を防いでいた槍がくの字に折れてしまっている。

とはいえ、弾力が豊かな材質は、持ち主の所まで刀をいかせない。その身は折れても文字通り、繊維質の皮一枚で留まらせていたのだ。折れた弓では力が入らず、優位性は遙に傾いた。このまま押し切ってしまうと、両の手に一層の力を加え、じりじりと押しつつある。

「くう！」

彩乃の苦しげな声が、しっかりとかみ合わされた歯の間から漏れると共に、遙の踏み込んだほうの足にしびれるような、通常とは違

う痛みが走った。

「うっ……！」

踝くるぶしを思い切り蹴られたのだと悟った時には、後から襲い来る鈍痛に足の力が抜けてしまう。加え、無理に彩乃が動いたものだから両者の均衡はすぐさま失われた。

この時、彩乃は押しきろうと力んでいた遙の力に半ば従って、折れた弓を自分の左方へと投げる格好で潜り、身は右方へ逃れる。

これにより大きく体勢を崩されてしまった遙は、つんのめりそうになりながらも一踏ん張りして、返す刀を逃れえようとする彩乃目掛けて振るった。

切っ先に何かがぶつかつた。無我夢中で何かとは解らない。

遙は尾を引く痛みと貧血でふらつく身体を押して足と重心を動かす、その場に踏み止まる。

目界を彩乃に戻すと、彼女は苦悶の表情を浮かべて左腕を押さえているところだった。

じわりと、腕を押さえていた彩乃の手の内側から、白衣には良く冴える袴と同じ色をした染みが広がった。

結構な出血量だが、深くはないらしい。彩乃はすぐに手を離して額に張り付いた前髪ごと汗を拭くと、刀の柄に手を伸ばした。

波紋の浮かぶ刀身が、強い日光を照り返して眩しい。

時刻は昼時を過ぎ、一日で最も暑苦しい時間帯に差し掛かっていた。身体中に湯を巡らしているのではないかと錯覚するほど、疎ましい暑さだ。

遙が手の甲で顎の下を拭くと、零したのではないかと見まがう量がそこで踊っている。垂れた分は熱された石の色を変えるが、目に見える速さで元に戻った。

彩乃は刀で矢筒の紐を切ってしまった。がしやりと音を立てて、彼女の背後に落ちる。

「随分暑そうにしてるじゃない」

彩乃は一呼吸置きながら、またあの口ぶりで遙の精神を逆なでし

た。

どの口がほざくのだろうか、遙は苛立って怒鳴りたくもなかったが、苦しいのは事実だ。何かまた、思惑があるのかもしれないと、油断無く見据えるだけで留める。

「人ならとつくに倒れてるはずなのに、よくもまあ……」

呆れたように彩乃は眩き、腰を落として中段で刀を構える。これまでとの相違があるとすれば、あの余裕だけは面から消え失せているところだろうか。

睨み合いはどれほどの時を要したろうか。

先に動いたのは彩乃の方であった。

それを見た遙も同時に歩を進めんと、足を踏み出した刹那である。遠くで空気がつんざかれた。

二度目の銃声である。

遙の目界が自然と村のほうへ向いた。

彩乃が役行衆である以上、あれは新助が縫に向けているものであることはほぼ確実である。

悪いことばかり考える。最悪な光景は、遙の瞼の裏に張り付いて離れなかった。

雑念を振り払った事には彩乃は目前にまで迫っていた。気合を発し、地を蹴って遙に切りかかった。

遙は腰を落とすと、それを真正面から受け止めた。

両者の間で火花が散る。

凌ぎ合いには発展しない。両者共に、きりがないと解っているからだ。

ぶつかり合った反動を利用して、遙は一步距離を置いた。すぐさま彩乃の動きに先んじて踏み込んで反撃に移る。

息を止め、続けざまに左右から連続して刀を打ち込んだ。

息も付かせぬようにと意図するそれは随分と荒い。とまれ、この太刀はどれも重い。

彩乃は最初、全ていなししたが、その面が苦しげになるまでにそう

時間はかからなかった。あれほど涼しげだった表にも汗が光る。

生来強靱な妖怪の身体は、大抵のことでは根を上げない。これまでの動きで消耗しつつはあっても、まだ遙にはこうした思い切った動きが出来るだけの余力があった。

彩乃もただ黙ってはいない。繊細さを欠いた遙の隙を突かんと狙い、浅いが遙の右腕にもう一つ太刀傷を負わせる。

しかし遙の動きを止める事叶わず、彩乃の体力は有無を言わず、削り取られていく。今や、この気候が完全に敵に回っていた。

良く耐えてはいたが、徐々に刀の動きが鈍くなってくる。その合間を縫って遙の刀が白衣にまで当るようになり、二の腕を始めとした箇所、見る見るうち赤い染みを増やしていった。

優位に立てた遙の方も、刀を打ち込むたびにわき腹と左腕に鋭い痛みが走り、全身を酷使する動きに息はあがる。頭もぼんやりとしてきているところだ。

これを当面無視して、無理やりに一太刀浴びせる機会を作ろうと、遙はずいと踏み込む。徐々に彩乃を追い詰めて行きたかった。

とにかく縫の所に一刻も早く行きたかった。顔が見たかった。あの銃声は、遙を無意識の内に駆り立てていた。

歯が割れるのではと思うほどかみ締め、受ける彩乃の刀を横薙ぎに払った直後である。

「あっ」

根競べに耐えかねた彩乃が体勢を崩してよろめく。

遙にとっては千載一遇の機であった。

「ふっ！」

短く息を吸い、鋭い呼気と共に大降りな太刀を見舞う。

彩乃はなんとかこれを受けるが、自分と刃の間に刀を入れるのが精一杯だった。

鈍い感触が伝わる。

刃は彩乃の鎖骨にまで届き、少し食い込んで止まる。

いよいよ押し倒されそうになった彩乃は大胆にも、遙の襟を握っ

て体勢が崩れるのには逆らわず引つ張った。

驚いたのは遙である。つんのめりそうになるのを堪えきつた頃には、これにより転倒を免れた彩乃の切っ先が食らいついてきた。

咄嗟に、何かをして防ぐなりしようとしたが、結局、単純な恐れから反射的に下がり、左手が出るだけだった

左腕に鋭利な物が通った感覚。

次いで、溢れる血潮と時を同じくして痛みがじわりと沸いてきた。着物ごと肌がぱっくりと割れ、切り傷を晒す。良い刀のようで、不気味なくらい切り口は鮮やかだった

とまれ、遙自身には傷の具合を確認する暇も与えて貰えず仕舞いである。

彩乃は返す刀で切っ先を突きこんできた。

狙いは胃の辺り。人体の中では何の抵抗も無く、刃を受け入れる部分である。

身を引いていた遙は、刀身に彩乃の突きこみを絡め、手首を動かすと狙いを自分の身体が入らない方向へと逸らした。

刃と刃が擦れ合い、耳障りな音が目をつんざく。

この刺突を最初から囮としていたかどうかは解らないが、切っ先を逸らされた彩乃は、そのまま遙に体重を預けるよう、身体ごとぶつかってきた。

続く大胆な攻勢に遙はどうすることも出来ず、押し倒される格好で倒れ込んだ。

「げふっ！」

背が地面にぶつかる寸前で頭を上げた為、後頭部を撃つことはないが、遙の背中には川原の石が当たり、特に骨と肉が薄い部分には激しい痛みが走った。また、衝撃で肺腑から空気が押し出され、一瞬呼吸が止まる。

遙は彩乃を抱きくような形で仰向けに倒れていた。刀は外にあって振るうおうとも長さが邪魔になる。それに、体重をかけた彩乃の手ががちりと押さえつけていた。その手には、あの陽炎がもやを

かけていた。

人肌の触れる温さが、これほどまで冷たく感じたことは無い。

息も絶え絶えにして、優位な位置を陣取った彩乃は、開いている左手で遙の喉を驚づかみにした。

人間離れた握力に、遙の喉の肉が沈み、気管が塞がれる。文字通り息が出来なくなった遙は、口をあけてか細く唸るしかできない。すると、彩乃の身体が少し浮いた。

「ぐ……えっ」

彩乃は踏み潰された蛙のような悲鳴をあげ、小刻みに身体を震わせながら、意識を保とうと目を白黒させていた。

馬乗りになったまではよかったが、胴のほうまでは拘束が行き届いてなかった。喉を塞ぐばかりに気をとられていたのか、遙が無理に捻って抜け出した足には気付かず、鳩尾に膝をめり込ませていた。彩乃の力が弱まる。

遙は腕に力を入れて彩乃を押し戻すと、足も使って彼女の腹を持ち上げるように上体を払った。

彩乃はあたかも添い寝するように遙の横にごろりと転がる。ようやくと呼吸を再開した遙はむせるに任せながら、すかさず刀を放り、寝返る要領で仰向けになった彩乃に馬乗りして動きを抑える。

先ほどまでと逆の体勢になった遙は脇差を抜いて彩乃の喉笛を搔っ切ろうと、白衣の大襟を掴んで刃を押し当てる。

「っ……!」

が、寸での所で動きが止る。

「化け物……」

彩乃が両の手で遙の手首を掴んでいた。

ままよと、体重もかけて押し切る。そう判断した遙は、体重とありつたけの力を込めた。

白い首筋に赤い線が引かれる。

が、両者の震える両腕は僅かながら前後するも、一進一退だ。遙の方は薄皮を裂いた所までしか進まず、彩乃の方は押し返す所まで

いかない。

そんな中、力を入れる遙の顔だけが体重をかけて下がってゆく。相手の面がすぐ傍にある。互いに秀麗なそれを歪ませて、互いの命を欲する。

彩乃の首の辺りに陽炎が集まってきた。

はたとそれに遙が気付いた頃にはもう遅い。

彩乃はうめき声を齒の間から漏らし、首元の刀身を押しやった。

そして、目を皿のようにして驚く遙の面目掛け、彩乃の額が飛んできた。

思わず目を閉じる。

「おぶっ!？」

ぐくもった悲鳴が仰け反った遙の口から、鮮血と共にあふれ出る。嫌な感触がした。

同時に、これまで経験したことがない鈍痛が鼻から脳天までを駆け巡った。頭の中で鐘を打ち鳴らされているようで、裂帛れっぱくの悲鳴を発した。

たまらず両の手で自らの面を押さえた遙の腹に、彩乃の足裏が叩き込まれた。痛みに敏感な所に痛手を被っている遙の股座またくらからさつさと片足だけ抜け出して、蹴っ飛ばしたものだ。

顔を両手の平で覆っていた遙はなされるがまま、倒れ込んだ。

やがて片手についてゆっくりと立ち上がるが、足元がおぼつかなく、少しよろめいている。顔を押さえた指の間から赤黒い血がぼたぼたと地に落ちる。

鼻の軟骨が折れ、前歯で上唇の裏側が裂けている。むせるたび、勢いあまって鼻血が噴いているのだから手の平が真っ赤になっていた。

「ごぼっ、げほ・・・っ！」

遙がそうしている一方、彩乃の方もすぐには動けだせなかった。

鳩尾に受けた一撃が尾を引いていたのだ。

呼んで字の如く人間離れした膝蹴りを鍛えようがない鳩尾に受け

たのである。せり上がってきた物をとうとう御しきれず、激しく咳き込みながら地面に赤い物が混じった黄色い水溜りを作った。

痛み分けの時間はどれほどだったろうか。

本人達には相当に長い時間だったに違いはないが、やがて申し合わせたように落ち着くと、互いに地に落ちた刀を拾い上げた。

「このっ・・・！」

鼻で息が出来ない遙はしわがれた声で声で一声吠えると、今まで以上の剣幕で彩乃に切りかかった。

力任せに彩乃を押しつけ、刃を何処かにねじ込もうとする。単調な繰り返しとはいえ、受けに回った彩乃はたまったものではなかった。外見上は遙に比べ軽傷だが、妖怪と比べ脆弱な身体の差が目立ってきていた。少しずつ続いていた出血もある。打ち込みに耐える時たま頭から血の気が引いた。

あの陽炎の助けもあって、なんとか耐えていた彩乃だが、その頼みの綱も何処か弱々しく、小さくなっている。それに、受けに徹するものの末路など目に見えていた。

「あっ！」

真正面から大降りに振り下ろした一撃を受けようとした彩乃の足元がふらつき、よろける。

これを幸いにと遙はさらに踏み込んで、重心を安定させようとした彩乃の足がった彩乃の手元を狙って打った。

硬い音を響かせて、彩乃の刀が宙を舞う。

刀身の根元を打たれた彩乃は、意思とは関係なく手から刀をもぎ取られた形となり、この日初めて顔を青くする。

遙はすかさず、返す刀を力任せに突き居れた。

弾力を突き破って、刃が埋没してゆく感触。

切っ先は右の鎖骨にあたって滑り、肉を裂いた。刀身こそ貫かないが、縫い止められたように彩乃の動きが止まった。

苦痛から、彩乃の顔には尋常ではない量の汗が噴いた。遙がそのまま突き放す要領で切っ先を引き抜くと鮮血が漏れ出て、白衣の半

分ほどの色が変わってしまった。

切っ先にも尾が引いた。地面には点で書いた線ができる。

上がらなくなった右腕は力なく下がり、指先からは血が滴り落ちる。しかし、それでも彩乃は、腰に差したままの脇差を抜くと、それを握り締め、遙に突きかかった。

あの陽炎は、もう何処にも無い。

緩慢な動きだ。遙は難なくそれを打って払う。

「うあっ」

遙の口から上ずった悲鳴が上がった。

脇差も手からもぎ取られた彩乃が、倒れこむように抱きついてきたのだ。乱暴に遙の着物を掴むと、首筋に思い切り噛み付いて歯を立てた。

ぶつりと肉を裂き、歯がめり込んでくる。まだこんな力があつたのかという驚きと、食いつかれるおぞましが背中でのたうった。

「っ」

不快感も露にして乱暴に彩乃を突き放つと、ベリベリと嫌な音を立て、彼女の口が赤い筋を引いて離れた。

もう立ってるだけで精一杯という彩乃に向け、遙は刀を振るう。

邪魔者が居ない刃は、逆さまに袈裟懸けとなって彩乃の身体を撫で斬る。

彩乃はこの一太刀を受け、動く左手で傷を抑える。そのまま千鳥足で数歩後ろに下がりながら、無言で遙を睨め付ける。

「はあ、はあっ・・・」

周囲は、静かである。遙が肩で息をする以外には、竹前川のせせらぎくらいしか耳に入るものがない。

固唾を飲む遙の前で、やがて彩乃は糸が切れた人形のように倒れると、一度大きく打ち震えたきり動かなくなった。朱に染まった白衣で見えないが、様子から見てもう意識が戻ることも無いだろう。

終わった。

そう認識すると、自分でもまだ残っていたのかと思うくらいの冷

や汗が出た。

「うっ」

次いで腹からせり上がって来る不快感を堪えきれず、遙はくの字に身体を折ってそれを吐き出した。

「げふっ、うう……」

吐き気は胃の中の物を全て出し切っても尚、おさまること無く遙を苛む。たまらずに四つん這いになって、獣のように唸り、嘔吐えずいた。

「はあ……」

しばらくそうして落ち着くと、遙はゆっくりと立ち上がる。自分の吐しゃ物から少し離れた所に再度膝をつき、荒い息を整える。耳鳴りと、絞られるような頭痛もした。

口の中で舌を一周させて唾を吐き出してしまうと、様々な物で汚れて使い物になるか解らない袖で刀の血だけ拭い、これを鞘に収める。

ぱちんという、小気味の良い音を立てて刀は鞘の内に姿を潜めた。続いて近くに落とした脇差も腰に戻す。

「痛……」

ここで遙は、首に異物感があることによつちと気付いた。

手をやると、何かごりごりとした物が当る。そんなものが元よりあるわけは無く、つまんで引き抜いた。

歯だ。

彩乃の歯が折れものだった。

良い心地はしない。振り返って彩乃のほうに投げたが、それが落ちるのは見届けない。

「……よし」

一つ気合を入れて遙は立ち上がる。立ちくらみでふらつきながらも、無視して土手の方に歩を進めた。

縫が今、どうなっているか。痛む身体を引きずって、土手のほうへと遙は駆ける。

土手越しでは、村がどうなっているのはまったくわからないが、平時とは違った空気が漂っている。風が運んでくるのか。とにかく、急がなければ。

土手まで小走りたどり着くと、もう息があがり、立ち止まれば目の前が暗くなる。なんとという距離ではないのだが、既に這ふほ（う）這ふほ（う）の体であった。

遙は身体中が訴えてくる痛みをしかめながら、これ乗り越える階段為に儲けてある足をかける。

しかし、彼女は一步上ったところで止めてしまった。

「？」

何か、不規則な歩調で土手の向こうに走るものがあるのを、耳で捕らえたからだ。

近い。

それに、足音が大きい。

ぐつと息を堪えると、遙はまた刀の柄に手を伸ばす。

「！」

それは、土手を途中まで登ったかと思えば足音を消した。

止まったのかと思う暇もなく、遙のすぐ脇を黒い影が横切った。

余りのことに驚いて、遙は振り返り様に半ばまで刀を抜いた。

「良かった無事かい」

しわがれてとても聞き取り辛い声の主が、目の前に居た。土手を飛び越えたのだ。

この癖、口調は、遙にとって忘れろと言っても決して出来ない物である。

「縫っ！」

巨大な黒猫の細い瞳孔に、遙の姿が写る。

白髪が混ざった毛並みの、この巨大な黒猫は縫が変化を解いた姿である。

再会出来たことに、まずは胸のしこりが取れて遙は安堵したのだが、縫の様子を見て別の戦慄が走った。

濡ればそつた毛は、水などではなく今も彼女から染み出ている血によるものだ。

それも一つではなく彼方あつち此方こちにある。こうして立ち止まっている間にも、ぼたりぼたりと滴り落ちるそれが、遙には縫の命そのものに見えた。

それに、縫がこの姿になる事はたまさかな事だ。遙が覚えている限り、あの時以来である。

「縫、酷い怪我」

「・・・話は後だよ」

縫は何か切羽詰った様子だったが、静かに頭を巡らせて化け蟹の死骸と、彩乃の亡骸、遙の様子を順番に細い瞳孔を持つ瞳に映すと、見て全てを察したのか悲しそうに目を細めた。

遙は体中切り傷だらけで、特に形の良い鼻が折れて青黒く染まっ
てしまっている様は痛々しく、彼女を知っている人物ならば皆同じ
反応を示すだろう。

「でも」

とまれ、外傷の度合いは縫の方が重症であるように見えた。

白髪の混じった体毛は、先述の通り自らの血であちこち濡れてお
り、毛は野良猫のようにボサボサである。特に左の後ろ足を酷く怪
我しているのか、終ついぞ浮かせたままだ。

「私は大丈夫だよ」

「でも」

「話は後だつて、言つたはずだよ」

遙はうわごとの様に同じ言葉を繰り返してしまふ。揺れる真つ黒
い双眸を真正面から捉えた縫は「有無など問わない」と、目だけで
訴えていた。

遙はどうしたらいいか咄嗟の判断がつかなかった。頭の中がぐち
やぐちやだ。ともすれば、縫抱きついて泣き出したいくらいである。
「文句なら後で聞いてやるから、今はそれ持って、さっさと乗っか
つてくれな」

縫は後ろに下がりながら自分の足元を前足で叩く。今は言つとおりによつと黙つて頷き、縫が示した方へ目をやる。

木で作つた土台に、円柱の鉄が取り付けられたそれ。血まみれの鉄砲だった。

土手を飛び越えた際に放つたのだろうか。丁度、縫の陰に隠れていた。

「失くすんじゃないよ」

腫れ物を触るような手つきで、遙は鉄砲を拾つた。見た目よりも、ずつと重量がある。何より、恐ろしいと思つた。

「っ・・・あれ？」

ぺたり、と遙はその場に座り込んでしまった。

何をしているのだらうと、自分でも理解が出来なかつた。

両足が小刻みに震えている。

立ち上がる事。赤子ではあるまいに。何度してきたかわからないその動作が、とても適わない。

手をつけば身体こそ持ち上がるが、震える足がまつたくいう事を聞かない。すっかり腰砕けになつてしまつた事に慌て、遙は縫の方に顔を向けた。

「まつたくしようがないね」

縫はそう言つて鼻を鳴らすと、ただ優しく帯を銜えて遙を自分の方へと引き寄せ、前足と首を器用に使つて背中に遙を乗せた。

「手は使えるだろ。自分と鉄砲が落ちないようにしてなよ」

言われるがまま、遙は白髪混じりの毛をしっかりと両の手で掴む。

「行くよ」

大きな足が地を蹴つた。ぐん、と遙の頭が動く。

荒馬の乗り心地より、更に悪い。必死に両手を使つて落とされないうちにしながら、遙は風を受けた。見る間に景色が後ろへ後ろへと下がつて行く。

「何処に向かつてるの？」

縫は川沿いに走つてゆく。こちらは竹前城下に続く街道へは遠回

りだ。おかしいと思って遙はそう聞いた。

「この先の群竹むらたけを迂回して、南磨口なんままでだよ」

「なんで？」

「舌嚙むから黙ってな。話は後だよ」

そうする経緯が全く思い浮かばないが、一蹴されてしまって遙は押し黙るしかなかった。

ふと、見るなど言われた後方を一生懸命首と目を動かして、見てしまふ。

小さくなつてゆく土手の上には、何人かの人が居てこちらを見ていた。

一目散に彩乃の方へ走っていくのは一人は新助だろう。すぐに解る。

他は村の百姓のようだ。農具を持って、何か慌しそつだ。こちらを指差して、大声で新助に食つて掛かつてるように見える。

言い知れぬ不安が、遙の心中で渦巻き続けた。

河相村編 終章（前書き）

役行衆 からの続きとなります。

どうにも今年の梅雨は本調子ではない。町で暮らす身としては良いのだが、農村は不安がるんじゃないだろうか。

隠れたり出てきたりでどことなく覚束無いが、一度躍り出れば丸いお天道様はかんかん照り付け、晴れという天気を懸命にこさえている、といった体だ。

とまれ、日照りというほど大げさでもない。現に昨夜も結構な雨だった。中庭には水の流れた跡が残り、小さな川を作っていたのが見て取れる。深い水溜りなどは乾ききらないで、日の光を照り返していて眩しいくらいだ。

夕立が来れば夜は涼しいというのに、夜降るから夕チが悪い。蒸し返して纏わり付く熱気が、どこに逃げてもそこに居る。思い切つて裸になるのが無意味だ。水にでも浸かっているくらいしか、逃れる術が無い。

客室の戸を全て開け放つて、屋敷の外側をぐるりと取り囲む廊下の軒下。せり出した屋根が作った陰で座り込んだ大男は、無精髭からじつとりと汗を垂らしている。背中濡れて、そこだけ着物の色が濃くなっていた。

「あつちいなあ。今日も」

力の無いため息混じりにつぶやくと、行儀悪く姿勢を崩したまま傍においてある水筒を口に持ってゆく。

中身は酒だ。

ほんのりと甘味を感じされる風味が口の中に広がった。飲み込めば、喉かかつと熱くなる。

それだけだ。他に何も無い。せつかく入れて来た上手い酒も、そう客観的に捉えることしか出来なかった。

酔いも来ない。元来うわばみを自負しているが、少しくらいは気分が上向くはずだった。

いや、酔う気分じゃ無いと言った方が正しいのだろうか。

僅かに茶色がかつた黒い瞳と身体は中庭の方を向いていて、そのくせ何も見てなかった。深い考え事をしているからだ。

普段、彼はそんな事を余りしない。せいぜい小遣いと酒代と、小遣いを貰える祿の日とを照らし合わせるくらいである。あとは眠いかとか、何をするかとか。

しかし、今日は違った。

ああでもない、こうでもない。自分だけで答えが出るはずも無いのは解っているが、愚にも付かぬ考えがまとまり無く脳裏から湧き上がっては、自分で否定する。この繰り返しを朝から続けていた。

要は、変に機嫌が悪いのである。

あの事件からは一週間が経った。

当日は、それはもう心の臓が口から飛び出んばかりに驚き、憤った。

血相を変えた男が何の前触れも無く、転げんばかりの勢いで門を潜ったのは小用も済ませ、打ち水をしていた時だった。

その男は迅之丞はやのじょうという。元親の友人で共に南磨口の門兵である。

何度か飯屋に行ったりもしていた知己の仲だ。

そんな彼が、血まみれになった遙と縫が南磨口に来て倒れたとかぬかすから一大事である。

すぐに馬と、屋敷に居た訓景くにかげを捕まえて現場に向かうと、息も絶え絶えになった縫と、顔を青くした遙が居た。遙の方は鼻を折られており、崩れた顔立ちの彼女とはまともにも目を合わせられなかった。すぐに門にあつた盾に寝かせ、縫は屋敷に運んで訓景が診た。

遙は暑さでのぼせ上がっていたが水を飲んで身体を冷やしてから、自分で歩けるくらいには回復した。

血を流すだけでもしようとしたが「私は後で良いから」と、ろくな手当てもしないで終始そわそわして落ち着かない様子だった。

それはそうだろう。縫は遙の母親と同意語なのだから。

せめてもと持っていった水桶で顔を洗い出した時には、ぽっかり

と月が浮かぶ時間になってからである。あの日は終日、皮肉のように天気が良かった。

その後は縫同様、訓景がすっかりとした手当てをしてくれた。鼻の骨折と、打撲、矢傷が特に酷かったそうだが、一夜明けると大体痛みも取れたそうだし、切り傷はほぼ塞がった。

思い出すだけで胃の辺りが重くなった。

情けない話だが、あの日は不安で夜も寝れなかった。そわそわしていたのは、自分も同じである。

政重はぶつけようも無い悔しさに眉根を寄せると、水筒の中身を煽った。

知らなかったのだから、こうした感情を抱くのはお門違いと言えばそれまでなのだが、あの時「いや、俺が行くよ」と縫に強く言えたならばと思うとやるせなかった。

「くそっ」

なんだというのか。

水筒に八つ当たりしようとしたが、直前で虚しくなってきた。止める。

もう起こってしまった事であるし。

大きなため息がついた。雲が多い青空を見て、呆とし始める。

後ろからはするするとした衣擦れの音。

これが耳に入ってきて、広い肩をびくりと震わせてしまう。そそくさと水筒を庇うようして、政重は振り返った。

「ああ、気にしないで良いよ。告げ口なんかしないから」

信用ならないと政重は思ったが、そんな心中とは裏腹に、安堵して口元が緩んだ。

開け放った客室と廊下を繋ぐふすまが開いていた。白い浴衣を着て、杖をつき、普段休みだろうと手入れが行き届いている髪はぼさぼさの、年齢に不相応な貫禄を持つ少女が立っている。

「なんだい、呆として。真昼間から管巻いてたのかい？それとも、無い頭絞ってわしの心配でもしてくれてたのかい？」

「うるせえよ」

ケケケツと、嫌らしく縫は笑う。政重は凶星をくらって面白くない。外へ顔を向けた。

「もう、出歩いても平気なのかよ」

「ああ。訓景が毎日よく見てくれたからね。もうだいぶ良くなったよ。あいつがそういつて出かけたんだから、もう大丈夫なんだろうさ。今日は帰らないって言ってたしね」

「そうか。・・・そうだな」

ふつと政重は笑う。

「なんだい。気持ちが悪いね。お前がそんな風に笑うなんてさ」

また衣擦れの音。今度は控えめだ。

杖に寄りかかって立っていた縫が「どっこいしょ」と、腰を下ろしていた。

「ああ？」

人が心配していたというのに、なんだその言い草は。

睨みすえてやろうと思って、政重は上体を捻って振り返る。

「！」

が、あんまりにも縫が大胆に座っているので慌てて元に戻った。

「・・・意外と初心だね」

「ふん」

「大の男が情けないね。先が思いやられるよ」

わざとだろう。面白い悪戯を思い付いた時の童と変わらない。

にやにやと笑う縫に対し、政重は先ほどとまったく同じく「うるせえよ」とだけ返し、また水筒を口に持っていった

特に酷かった彼女の怪我は鉄砲傷だった。小屋でくつろいでいたら新助とかいうのに、出会いがしらで左の太腿を撃ち抜かれたのだという。

訓景曰く、不幸中の幸いだという。衣類しか身につけていなかった為、弾は割れずにそのまま貫通した。しかし、その出血量で考えればこうして話をしているのが不思議なくらいである。

その後、彩乃におびき出された遙も動けなくなった。

縫は槍で突きかかってくる新助とやらをどうにか一度撒き、簡単に止血をして、逃げ隠れしながら対抗しようとした。

そうこうしている内に、新助は村民を扇動したという。これは後の話だと失敗したそうだ。

鉄砲を持っているのだから当然といえば当然だろう。

ただ、端から人を信用しない縫は追いつめられて変化を解いた。それが過剰な反応に結びついてしまったのは、当人も言っていたが、失策だったかもしれない。

これを見て錯乱状態に陥った与一が、縫を切りつけたのだそう。これはすぐに調べが付き、彼は仕置き部屋に行ったはずだ。

そうこうしている内に二射目の鉄砲を縫は受けたが、動いていたので当らなかった。

この弾込めの時間を狙い、役行衆が関わっていた事を照明するために縫は鉄砲を奪い、遙と逃走して難を逃れた。

その後は、件の如し。

「・・・他の怪我はもう塞がったのか？」

「あらかたね。もう殆ど痕も残って無いよ」

ろくな準備もして行かなかったから、新助とかいうのが槍を持ち出した際には、相当縫は苦しめられたはずだ。さっき見たときは腿以外に目立つものはなかったが、最初は全身晒しまみれだった。

「足の方はまだ晒し取れないんだな」

しつこいようだが、さっき触れた鉄砲傷の事も聞く。

「なんだ。ちゃんと見るところは見てたのかい」

「・・・っ」

さも愉快そうに縫は喉を鳴らした。

なんの恨みがあるのか、彼女はしょっちゅう突っかかってくる。

聞こえるようにわざとらしい舌打ちをしてやった。

「そんだけ無駄口叩く元気あるなら、もう平気だな」

「無駄口だなんて、酷い言い草だね。誰のおかげで鉄砲持ってこれ

たと思つてるんだか」

ふん、と誇らしげに縫は鼻を鳴らした。

確かに、そうだ。

仮に鉄砲が無かった場合、役行衆を領内に抱える永石家とのやり取りには難航するだろう。

「鉄砲かぁ・・・」

口に出すも忌々しい名前がこぼれ出た。

「あれは、どうなつてんだかなぁ」

「仕組みは大体解つてんだよ。あの火薬とかなんとか言つ、燃える粉が作れないだけさ」

「そうは言つけどよ」

政重は、一度言葉を切つて酒を流し込んだ。

「あれさえ無けりやなぁ」

好き勝手やつてた頃が、妙に懐かしく思えた。

あんな見えない矢みたいいな物さえなければ。

「そう言つなよ。もしもつて事はないんだ」

「まぁな」

「人に飼われるようになってからは、昔より随分良い暮らし出来るようになったよ。お前もそうだろ？」

自虐気味に言つて、くつくつと縫は笑う。

それは確かだが。

「うるせえよ。あれはあれで、気に入つてたんだ」

何度目になるか解らないそれを吐き捨てた。ため息まで後に続く。

「ま、言いたいことは解るよ。だけど、今となればもうこの中で上手くやるしかあるまいよ」

「まぁ、そうなんだけどな」

事実だがそう言われると、図体ばかり大きい自分が惨めにすら思えた。

「それにお前さん、自分で此処を選んだろ。管を巻く前に無い頭絞つて何か考えな」

「何でいつの間にかお前が説教してんだよ？」

「さあねえ？わしは知らないよ。でっかい性悪な虫が湧いたからじゃないか」

「へっ。言ってるよ」

思わず笑いが出た。

理なり論なりでいちいちもつとも諭されるより、すっぱり一蹴される方が、よっぽど良い。

我ながら単純だとは思う。頼ってるのは、皆と同じか。

「あーあ。今頃遙の奴は上手くやってんのかな」

酒の助けもあつてか、気分が上向いてきたは良いが、胸のしこりが完全に取れたわけではない。

「大事だからね」

「ああ」

一連の騒ぎ自体は門番の元親が気づいたこともあり、遙と縫が逃げおおせてからすぐに調べが入った。

彼の話では、その頃化け蟹の死体以外に他所のものは見つからなかったという。さつさと逃げおおせたかどうにかしたのだろう。

ともあれ、停戦中にも関わらずにこうした煽りとも取れる行動は国の大事にも発展し得る。

今日は城主茂義が直々に河相村を訪れ聴取を行っているはずで、遙も同行している。丁度今頃も、やっているのだろう。

それまでに、福一にも話をよく纏めておくようにと通達もしたのだという。

茂義は当事者の縫と遙両者の回復を待ったが、これ以上遅れさせる訳にもいかぬと、遙だけが出向いていた。

ついていくとは申し出たが、「留守を預かる番が居ないから」と遙に断られてしまった。もつとも、城主がついているのだから、心配することは何も無いし、知患者でも無い自分が行ってもたかが知れているのだが。

まずは、あの二人を迎え入れた事に関して調べが入るはずである

が、僧体で解らなかつたと言えばそれまでであるし、事実そうだろう。これは大した事には問われぬはずである。

「与一は斬られるかな」

「さてね。茂義次第だろ？城主なんだしね。私たちが首突っ込むことでも無いだろ」

その通りだ。

しかし、政重が心配するところは百姓のことではない。

「もしそいになったら、遙が多分気に病むだろ？それが嫌なんだよ」

正直に心中を吐露すると、縫は珍しく同意してくれた。

「まったくね。いつちよ前に鬼のくせして人の事ばかり気にしやがって。わしはもうすぐあらぬよ（あの世）に行くつてのに、向こうでどう言い訳しろって話だよ」

幼少の頃からの母親代わりとして遙の面倒を見てきた縫は、物憂げに大きなため息をついた。

「生真面目にしたのはお前なんだから、どうにかしろよ」

「いや、あの性格は初乃はつの譲りだよ。わしは関与してない」

「じゃあしやあと、縫は責任転換をしてみせる。」

「奴はね。そりゃあ頑固だったよ」

親友だったと言うのに、縫は初乃について話す言葉に容赦が無い。いや、それを含めて親友と言うべきか。

「そりゃあ親に似る部分はあるだろうけどよ。初乃が最後まで育てたつて、ああはならんかつたんじゃないか？」

「世情がガラって変わつちまつたら？そうならなけりゃ、わしが育てることも無かつたよ」

「もしもは、なしだろ？」

政重は意地悪く縫の言の葉を借りた。

「解つてるよつ。確かにわしがああしたよ。人を気にさせるように教えたよつ。ああ、そうしたさ！」

自分で言つて自分で憤つたのか、縫は鼻息を荒くして早口にまくし立てた。「いたたたつ」と付け加えたところから、必要以上に力

んで足にまで響いたものらしい。

珍しく自分の非を認めた縫に政重は驚きを隠せなかった。

しかし、そんな彼女も珍しい。普段弄くり回されている分もあり、逆の立場に立った時どんな顔をしているのか興味をそそられたのは事実だ。

政重は出来るだけ嫌味な笑いを作ってから縫の方に向き直った。が、凄まじい眼光で睨まれたので急いで元に戻す。

とはいえ一連の言動からして、彼女がらしからぬ責任を感じているのは事実のようだ。

縫はまた、大きいため息をつく。

「とまれ、加減が解らんじゃないか。わしだつて、まさかこうやって人間どもに飼われるとは思ってなかったしね」

「それは俺もだな」

これには素直に同意した。

「ま、お前に言われちまうようじゃあ、いい加減ケリ付ける機会だね。あんまり引きずるようなら蹴っ飛ばしてやるよ」

らしい答えだと、政重は鼻で笑った。

「なんだよ」と、また縫は不満そうにするが、嫌な意味でないのは解ってくれたようで、それ以上は追求してこない。

結論を縫が出したものだから、おもむろに会話が一度切れる。

しばし間が空いた。

こうすると静かなものだ。時たま、風鈴が踊って涼しげに鳴るくらいか。

だからこそだろう。控えめな衣擦れの音に一々気が付くのは。

「うん？どうした？」

「ちよいと廁まで小用を足しにね」

「ああ、そうか」

後ろに目をやる。口に出さないものの、やはり足が痛むと見え、縫がゆつくりと立とうとしているところだった。

政重は片手をつくくと、

「おい平気か？手伝うぞ」と申し出た。

「ああ？良いよ。お前に下の世話なんかされたら、それこそ笑いのタネにされちまう」

「誰がそこまで言って言ったよ」

憤慨に声を震わせる政重を尻目に、またくつくつと喉を鳴らしながら縫は廊下に姿を消し、「せいぜい見つからないようにしなよ」と声だけで忠告してきた。

「ったくよお。んなこと解ってんだよ」

さも不満げに独りごちる。再び静寂が戻った。

相変わらず生ぬるい風が風鈴を鳴らし、他は鳥が鳴くか、庭の木の葉がそよぐか、自分が動くかくらいの音しかない。町の喧騒もこんな外側に居ては殆ど届かず、元来人通りも少ない。

「ふう」

安心した。

縫のあの様子なら、ここ数日のように無理に元気そうに振舞っているという感じではなさそうだ。

付き合いはまだ短い、なんとなく空気で解る。ここ数日前は相当無理をしていた。無用な心配をかけぬようにと。

遙の方がその辺りに敏感だ。だから、彼女の様子からもそう感じられたのかもしれない。

あんな屁理屈言いだ、自分で言った筋は通すし、世話焼きだ。

彼女のそんな所を、この大男は好いていた。

解決するかは解らないが、縫がああやって言うのなら心強い。ひとまず気持ちも落ち着けて来た。

水筒の中身を一気に煽って空にする。

「美味しいな」

つい先ほどまで水のように味気無かったそれが、彼の知る甘美なものに変わった。

単純な頭だと、政重は口元を緩ませる。

目を閉じてみた。

風情を楽しむ、などと言う洒落た事は無縁だと自他共に認めているが、たまには良いんじゃないかという気分になった。辺りは先述の通りの静けさだ。

風が吹くと風鈴が鳴る。これが一番耳に入ってくる大きな音だ。普段あつても無くとも変わらんよと聞き流してるが、よくよく耳を済ませてみればなかなか涼しげである。

それに段々気持ちが悪くなってきた。自然と頭が落ちそうになる。縫が戻ってくるかどうかは解らないが、少しくらいは良いだろうと、欲求に負けて横になる。無論、空けた水筒は懐に隠しておく。と感覚が朧になってきた。

なんとも言えない心地よさである。

今の時期は日陰。寒くなれば日向。年中それを繰り返してのんびり過ごしている猫は、この時が好きなのだろうか。

だとしたら、まったく良いご身分だ。どれくらい、そうしたろう。

最初は何かが背中に当たった。

「？」

「・・・ねえ？」

身体が揺さぶられ、遙の呼び声が耳に入る。

「うおおっ!」

口を半開きにして転寝に入っていた政重は、急にかつと目を見開いたかと思うと、素っ頓狂な声を上げて飛び起きた。

「うあっ!」

驚いたのは起こした遙でもある。一気に飛び退いて胸に手を当てた。

「な、何？」

怪訝そうな真っ黒い瞳が、政重の覗き込んでくる。少し混乱した彼は落ち着くと「夢を見てて吃驚しちまったよ」と笑って見せ、懐にある例の物には触れないよう勤めた。

「ああ、なんだ。吃驚した」

遙は疲れた顔でため息をついた。相当驚いたのだろう。顔が紅潮しているのが、晒し越しに見て取れる。

まだ遙の骨折は治らない。他はあらかた回復したが、痣になって見苦しいからと鼻はこのように晒しを巻いて隠してあった。

もうすぐにも良くなるだろうが、見ていてやはり痛々しいものがあった。

「随分早かったな」

「うん。円滑に進んだから」

遙はゆっくりと頷いた。表情も暗くない。

円滑だったのなら、良かった。もっと揉めるものだとばかり、政重は思っていた。

「それより、縫が部屋に居ないんだけど・・・」

忙しなく表情が変わる娘である。今度はうるたえるようにして、縫の心配をする。先に屋敷を見て回ったのだろう。

「あん？なんだい。帰って来たと思っただら大声出して。傷に響くよ」と、絶妙なところで縫が襖の陰から顔を出し、割って入った。

「あ、縫っ。安静にしないで」と

弾かれたように遙が向き直る。彼女はまだ縫が出歩けるほどに回復したのを知らないから、当然だろう。

「痴話喧嘩かい？」

そんな彼女の気遣いを真っ向から無視して、縫は的外れな事を言った。

「違いますっ」

一転、腹立たしそうに遙は目を細める。どうにも、あらかた回復したという結論に一瞬で至ったようである。

さすがに同姓で付き合いが長いだけの事はあり、阿吽の関係だ。

「一々もつともそうに受け答えしていると、疲れちまわないかい？」

「疲れないよ」

「そうかい」

少しむくれてしまった遙を尻目にして、縫は喉を鳴らした。

彼女はそう言うが、どう答えるべきか図りかねるような事しか吐かないのだから、どうしようもない。

もちろん本人は、それを解っているのだろうか。

「まあ、立ち話も難だよ」

遙と政重が見ている前で、縫はゆっくりと客室に座り込んだ。手の動作だけで「二人とも座りな」と言ってくる。

政重は黙って従い、心配を棒に振られた遙は、ささやかな反抗だろうか。少し遅れて従った。

三人が向かい合う形になった。

「結局、今日はどうだったんだよ？」

前置きも無く率直に縫は問うた。もちろん今日の立会いの事に関してだ。

「ん。結論から言えば」

一つ咳払いをして、遙は切り出した。

「永石家からの関与は無いという事で落着。村の人も、僧体だったあの二人に騙されてみたい」

「そうかい」

「そうか」

政重は安堵のため息が漏らす。ほうと縫も息をついた。彼女もまた、懸念していたのだ。

「しかしよ、なんでそう言い切れる？」

新たに出た疑問を遙に投げかけた。

「私達には知らされてなかったけど、大殿の所には直接書状が既に届いてたみたい。それも向こうの偉い人が直々に使いに来たとかで」

「随分早いね」

「感心した風に縫は頷いた。

「これが写し」

遙は懐から一枚の紙を取り出して、よく見えるよう丁度三者の真ん中で開いた。そこには彼女の字で、国境を越えて竹前の隣に位置

する嬰撰城主、平川伸禎えいせん ひらかわのぶさだからの文面が綴られていた。

梅雨時特有の挨拶から入り、今回のことについては一切関与しておらず、報せも受けていなかったという旨。永石家当主である永石ながいし景勝かげかつに使いを出した事。その後、処理については協議によって決定するという旨がそれぞれ記されている。

最後に、今回のことは当方にとつても遺憾であるとして謝礼の替わりに黄金一枚を贈呈する旨がある

「黄金一枚かあ。随分と羽振りが良いな」

わざわざ黄金一枚までつけてくるとは、大盤振る舞いだ。

「それだけ連中も必死になって、手を焼いてるんだらうよ」

「でもよ、役行衆は永石領内の一揆にすぎねえんだろ。いくらなんでも、暴れまくってちゃ、やばいんじゃないのか？」

一揆は、志を共にした者同士自由に集まって行動出来るという性質上、その土地を治める城主が、大きくなれば当主にとつて有害だと判断されれば潰される。今回のように、あまり大つぴらに振舞つて良いのだろうか。

「鉄砲に使う鎌薬の輸入は役行衆しか出来ないから、多分それを懸念してるんだと思う。それに、もう一揆って言う規模じゃなくなつてるのかもしれないし」

遙が苦い顔をした。

「いざ戦になれば、またあの時みたいに来るからね。どうにか、備蓄しときたいんだろ。どうなってるかは、図りかねるがね」

「ああ、そつか」

他国。主に永石の情勢に関しては、殆ど解っていない。お互いにあまり関与し合わない事で、この百年近く平穩を保っている訳であるので、当たり前のことではある。

とまれ、火薬を唯一仕入れられるアテというのなら永石の連中の気持ちも解る。どうにか言いくるめたいが、あまり強い姿勢では美味しいところを取れない。

「ま、奴らの事は解らないからね。ひとまず戦の心配はない。これ

だけでも朗報だよ」

「大殿もそう仰つてたけど、近々、上様と協議するみたい。お礼の書状はもう嬰撰城にまで使いを出したって」

ふん、と縫が鼻を鳴らす。難しい顔をして、爪を噛み始めた。

「領内で役行衆を名乗って呼応しようとする莫迦が出るかもしれないね。一揆には気をつけたほうが良いよ」

「そうだな」

頭の痛い問題だ。少し、気に留めておかねばなるまい。

「まあ永石の連中も、扱いに関しては苦労してるって考えた方が良いかもしれないね。それくらいの力をあいつらが持つちまつたって事のほうが、よほど問題つてところか」

厳しい面持ちで皆が唸つて話が切れた。

考えている事は同じだろうが、ここで答えが出るわけでもない。

遙が口元に持つていった手を膝に戻すと、一同が伏せていた目を上げる。

「この書状の件は、もう一回みんなの前で話したほうが良いよね」

「そうだね。明後日はみんな居るだろ。その時よく話そう」

この件についてはしばらく尾を引きそうであるが、ここでどうこう言つて動くわけでもない。大部分は上に任せるしかないのだから。「話は変わるが、あの百姓の事だけだ」

小さく咳払いしてから、どうなったのかね？と、縫は気を遣つて言いよどんでしまいそうな事を率直に聞いた。

「与一さんね」

錯乱して縫に切りかかった百姓の名が出てくる。

「大殿から私が決めて良いって言われたから、許したよ」

「ああ、そうかい」

肩透かしを食らうほど、あっけらかんに縫は了承して話は終わった。

もう少し、食つて掛かるくらいはすると思つていたのだが。

「それで良いのか？」

「ん？」

あんまりに素直に話を聞くものだから、政重はつい食い下がって聞いた。

「こいつが決めて良いって言われて、そう判断したんだから何も言う事ないだろ」

少し苦い顔で続ける。

「時間がいずれ解決するって言う考えには、皆と一緒にわしも賛成してるしね。それに、今は恨みを買っても仕方が無い。そんなところだろ？」

「ん」

遙は頷いた。

「まったく」

大きくため息を交えながら縫は疲れを面に押し出した。

「撃たれ損だねこりゃあ」

「そう言わないでよ。今度お礼持って来るってさ」

ふてくされた縫を遙が眉を八の字にして宥めるが「百姓の持つてくるものなんて期待してないよ」と一蹴してしまった。

「それより、腹が減ったよ。しばらくろくな物を食べてない。りよの飯屋にでも行こうよ」

「その身体でか？」

まさかこんな状態で、りよの所まで行くというのか。少し驚いて、政重は真っ直ぐ縫の鉄砲傷を指差す。

「お前、今回何の役にも立たなかったその無駄にでかい凶体を、良いように使おうと思わないのかい？」

縫は先ほどの疲れた顔を政重の方へ向け、思い切り肩をすくめた。

「お前が負ぶって行くんだよ。物置に背負子がある。お前は老けて見えるし、傍目によ変には映らないだろ？」

「嫌だ」

政重は即答した。

「とまれ、なんでそんな急に」

「たまには良いじゃないか。ねえ？」

苦い面持ちで反対する政重を差し置いて、縫はさつきから苦笑い
を続ける遙に話を振った。

「別に良いと思うよ。ただ、駕籠かしょくらい呼ぼうよ」

「タダに越したことはないよ」

「いやでもさ、政重だって好きで今回待ちぼうけくらった訳じゃな
いんだしさ……」

困ったように笑って、遙は縫を嗜める。

あの日の朝、半ば無理やり政重をどけてついていったところを言
ったのだと彼が思い至った頃には、縫が細く息をついていた。

「じゃあ、仕方ないかね……」

少し残念そうに縫は息を付いた。

「それじゃあ、駕籠呼んで来ておくれよ。わしは着替えるからさ」
歩けば時間がそこそこかかる。縫は、もう出るつもりみたいだ。

「俺がか？」

「怪我人の遙に走らせて、お前が着替え手伝ってくれるのかい？」

「解ったよ。悪かったよ」

全く嫌な言い方をする女である。遙などは、さつきから苦い笑
いを政重に向けまいと少し下を見ている始末だ。

「じゃあ、すぐ呼んでくるからな」

「あいよ。遙、手伝ってくれ」

「ん」

遙は素直に縫に肩を貸した。

そのまま彼女らを先に行かせた。二言三言、具合を確かめ合いな
がら廊下のほうへと歩を進めて姿を消す。

「さて」

一つ気合を入れて立ち上がると、政重は足早に馬小屋へと向かっ
た。

河相村編 終章（後書き）

ここまで読んでくださった方。ありがとうございます。

私自身こうした活動は初めてなので、至らぬ部分が多々あったかと思えます。が、これからより良い物を作れるよう、努力していくつもりですので、よろしくお願いします。

この「不倶戴天」ですが、力量不足で完結させることが出来ずしばらく続くこととなります。

不定期ながら出来次第、投稿させていただきますので最後までお付き合いです。幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4876s/>

不倶戴天

2011年4月16日20時40分発行